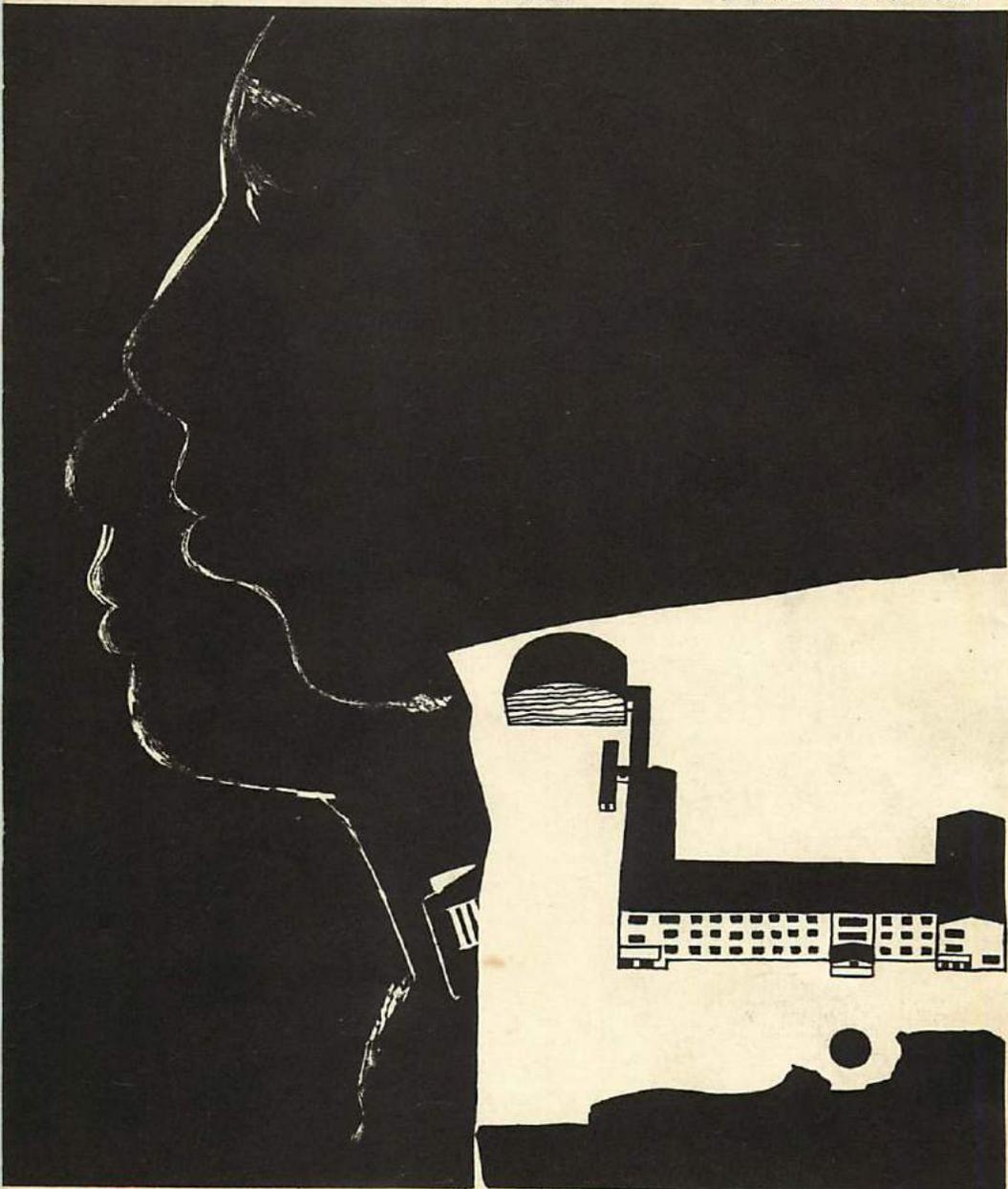


五稜

第4号昭和40年3月発行

・ 函館市立五稜中学校 生徒会

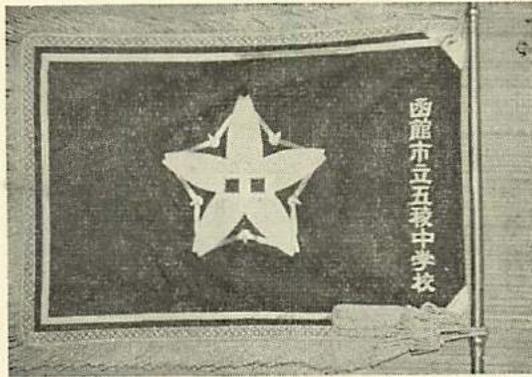


1965

4

第 四 号

五 稜



校 歌

一、ひんがしに

たたなわる

若人の

水上に

新しき

大いなる

古城いだきて

五稜が丘は

息吹きに満ちぬ

ふるきをたずね

光に立ちて

力伸ばさん

二、さくら花

友がきの

うち鳴らす

ひとすじに

築きゆく

ああ とわに

しるしと仰ぎ

堅く結びて

自主の鐘の音

まことを弱め

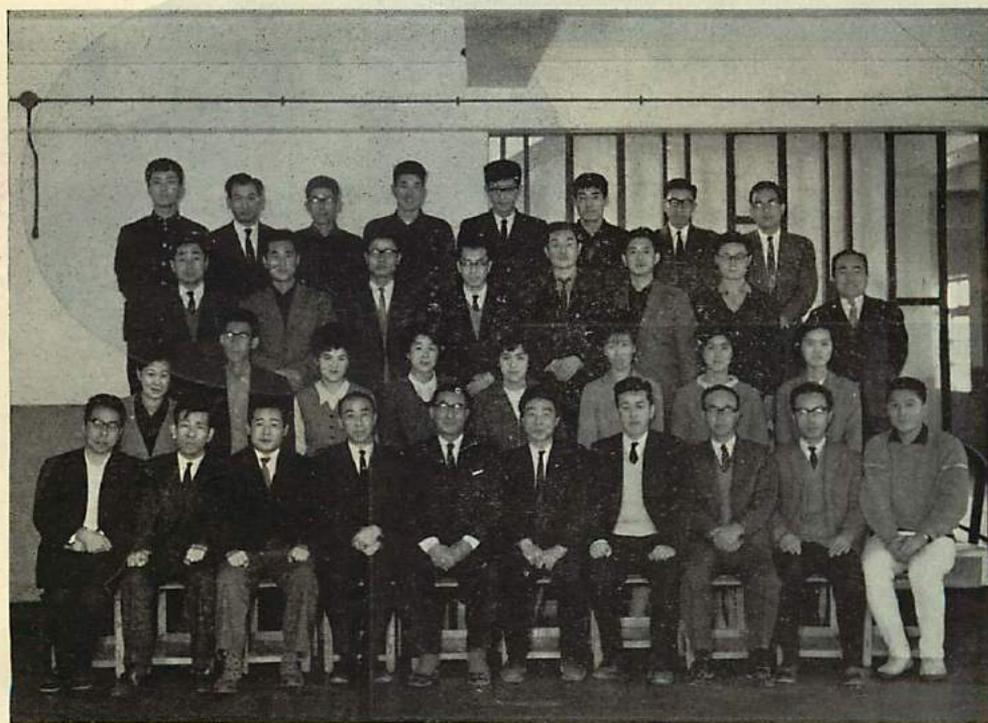
理想のすがた

われら栄えあれ

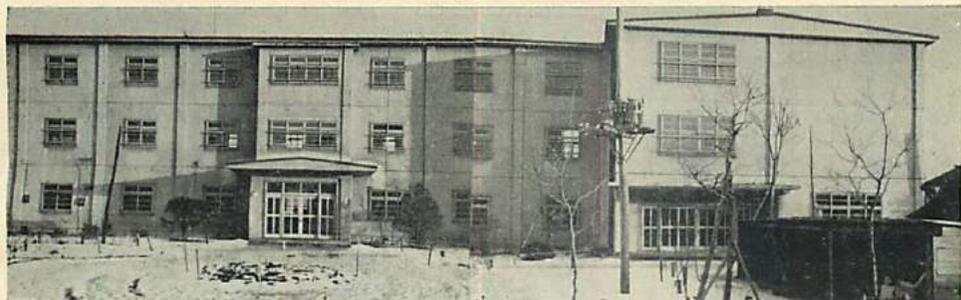
自主勉勵
友愛協調



校長



全職員



校舎正門



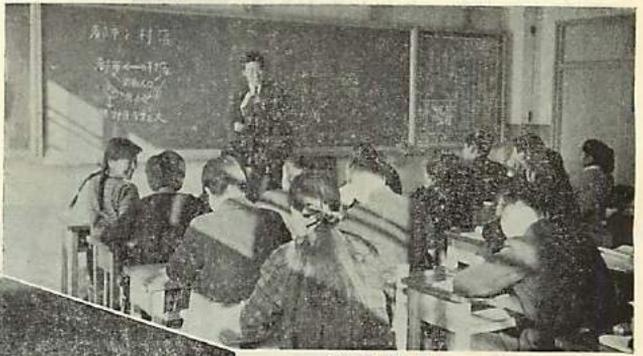
朝会風景



ある日の職員室



代議員会



学習風景



テスト風景



学習風景



楽しい昼食

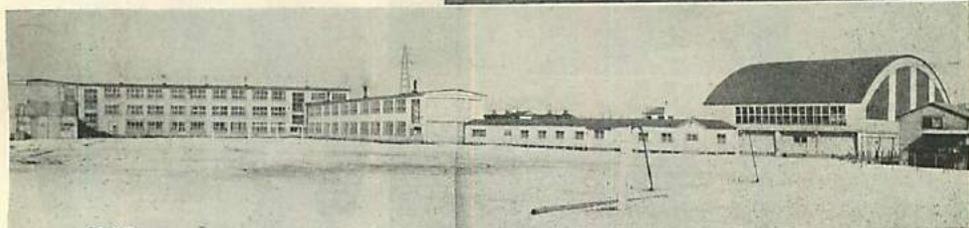


学習風景



弁論大会

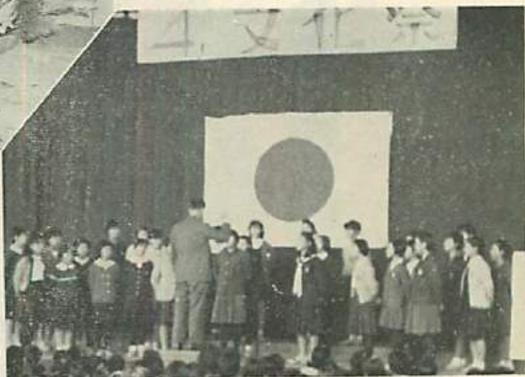
学校造園作業



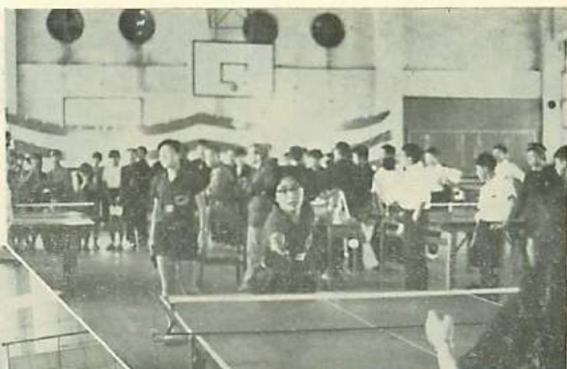
校舎全景



文化祭



中体連バレー



中体連ピンポン



修学旅行





運動会



遠足



写生遠足

五 稜

目 次

	表 紙	安 井	孝
巻 頭 言		1
卒業生を送るに当つて 校 長		2
卒業式を迎えての感想 生徒会長		3
学級プロフィール 3A ~ 3G		4
職 員 随 筆		9
	釣り と 私	坂 牧 達 夫	
	奥尻島旅行記	西 谷 富士雄	
	交 遊 抄	竹 内 巖太郎	
論 説		17
詩		21
短 歌		25
作 文		27
部 報 クラブの歩み		41
専 門 部 便 り		47
は げ 銭 別 卒業生に贈る先生のことば		50
39年度学校日誌から		53
39年度受賞者一覽		56
卒 業 生 住 所 録 3A ~ 3G		57
職 員 一 覽		64
編 集 後 記		65

学校遠望

丸山 薫

学校をおえて歩いてきた十幾年

こうべをめぐらせば 学校は思い出のはるかに

小さくハダるの浮き彫りのようにかがやいている

そこに教室のむねむねがかわらをつらねている

ポプラは風に裏がえって揺れている

先生はなにごとかを話しておられ

若い顔たちがいちようにそれに聞き入っている

とある窓でだれかがよそ見して

あの時の僕のようにぼんやりこちらをながめている

彼のひとみに 僕のいる所は映らないのだろうか？

ああ 僕からはこんなにはっきり見えるのに

(少年少女文学選集
現代詩集より)

卒業生を送るに當つて

校長 沼山 吉之助

昭和三十三年四月、真新しい新校舎で、体育館こそなかったが、通し教室の式場で、感激の入学式を挙行したことが、つい此の間であつたような気がする。

諸君は、新校舎での第一回の入学生である、そういう点では、第一回生より晴れ晴れした出発が出来た。

校舎未完成のため、随分苦勞も多かったが然し先輩を助け、協力して、明るく楽しい三年間の生活であつたと思う。

最上級生としての、この一年間を振り返つて見たとき、本校の伝統、精神の昂揚に頑張つた、中体連大会での活躍は、昨年以上で陸上大会では、実力がありながら一点のことで総合優勝を、のがした。然し、五稜中の意気を十二分に發揮したことは、將來の思い出として残るであらう、其他卓球の優勝等数々の輝やかしい成果をおさめた本年度は、文化活動が活潑で各種に入選、五稜中の眞価を示したことも、忘れることが出来ないだらう。今後在校生に一段と、此の方面の活躍を期待したい。

本校の発足当時から

◎ みんなによるこぼれる学校 ◎ みんなが幸になれる学校

これをお互の合言葉としてこの願いを達成するために、われわれの仲間から一人の落伍者も出さぬようにしようとなつて来た。今一つ強く唱えて来たことは、時間を大切にすることであつた。個人個人が計画的に、上手に使うということだけでなく各クラスで学力を向上させるために、どううまく時間を使うことがよいかが討論され、朝の時間の使い方等、最近相当盛上つて来た。然し、ここで今一度考えて見たいことは、もっと、もっとお互同志が、仲をよくするということである。

仲をよくするということは、自分が根源ですから、どんな人間でなければならぬかが根本の問題となつて来ましよう。

根性曲りとか、意地悪とか、へそまがりとかで仲が悪く、人間社会では、円満に調和し、協調出来ぬ人であつてはならない。そこで常に自分の心を矯めて、教養を高め、仲よく平和な生活が出来るようつとめなければならぬ。お互の持つてゐる、よさを出し合ひ、認め合つて、長短相補ひ、今一段の切磋琢磨を望みたい。学校は烏合の衆の集り場所ではない。全生徒が仲よくして、総ての生徒の力が合一されて、始めてその総和的威力が発揮されるものである。仲よくするということは、単に喧嘩しないというだけでなく、自分の知識学力などをおしみにく出して、お互がより以上プラスになるよう助け合うことである。

それによつて全体の水準も高まる、自分もより以上向上することを自覚すべきである。更に考へていたゞきたいことは将来、とも仲をよくすることによつて、人間社会から、争いをなくすることである。

卒業式を迎えての感想

山崎正吉

横津の峰の白い帽子も、まだ小さく残っている余興の候、毎朝登校のたびに仰ぎ見る学舎を後にする日も、日一日と近づいてまいりました。振り返ってみれば、母と共に真新しい服を着て玄関をくぐり、今の三年C・D組の通し教室で入学式を迎えた日から、はや三年という長い月日が、流れ去ろうとしています。

私達が、入学した当方で、一番思い出に残っているのが、体育の時間でした。今では、立派な体育館があり、体育の時間には、力の限り、あばれ回っておりますが、当時は体育館がなく通し教室でした。ですからマット運動・跳箱が窮屈でない程度に、やっと出来る位でした。もちろんバレーボールやバスケットボール等は出来ませんでした。

それから、科学の時間も、もちろん実験室は、ありませんでしたから、化学の実験等は教室で実験道具を持って来て見せて下さいましたし、ない時は、黒板で実験してくれました。もちろん図に書いてです。

このように、私達の入った当方もいろいろと不便な事、不自由な事がたくさんありました。しかし、私達の先輩である第一回卒業生のみなさんは、これよりも、もっと不便な苦しい環境の中で勉学に励んでこられました。その様子は先の五稜にも出ておりましたが、そういう状態にあつても、他校の生徒に負けないようにがんばり、立派に巣立つて行かれました。私達は、そういう先輩を持ったという誇りを持ったと同時に、彼等より立派になるという責任も感したのです。私達の境遇は、彼等よりずっとよい。体育館や音楽室も、彼等より多くの時間使えたし、実験室もあれば、技術家庭科室もある。また、相談室には本が十分そろってきたし、音楽室には、立派なステレオがあつて美しい音楽も聞ける。このような完成真近かに控えた校舎で、いろいろな教材のそろった恵まれた環境の中で、私達は、彼等に負けないよう立派になろう、いや、ならなければならないと、がんばつて来た。彼等に及ばない面もあつたでしょう。が私達も、私達なりに努力してきました。又、前生徒会長という学校づくりの開拓の精神も、みんなが持ち、一生懸命励んで来ました。

ひんがしに、古城をいただいた我校を生涯忘れはしません。さくら花、しるしと仰ぎ、自主勉勵・友愛協調の精神のもとに、暮したこの三年間は、生涯の思い出としていつまでも私達の心に残るでしょう。

もうすぐ、二年生に最上級生のバトンを渡すこととなります。彼等も、私達以上に立派にするようにと、力を尽してくれるでしょう。ここで、御指導下さった諸先生に、又、お世話になつた方々に、厚く御礼申し上げます。今後とも、薩ながらの御鞭撻をお願いします。

我々も、第二回卒業生としての誇りを持ち第一回生に負けないよう、理想を築き上げ、大いなる力伸ばさんことを約束します。

学級プロフィール

気安い仲間

三年 A 組

私達のクラスを紹介すると、まず、この組は気やすい仲間がそろって、男でも女でも全然気にしないで冗談を言い合っている。二年生の時は男は男、女は女と、いうような感じだったがこのごろはちがう。仲のよいのはいいのだが時々度がすぎてうるさくなり、隣が職員室なのでしかられることもたびたびあった。私達のクラスは狭いので二列ずつ机がくっついていて、せいかもしれない。又、生徒会役員選挙の時も皆気にしていないふりをして、なにかしら手伝ったり、応援して生徒会長、副会長、会計の三人をそれぞれ当選させた。

私達のクラスの欠点は少々グループができていて席替えをしてもいつもかたまっている。しかしこれは厚いベールでおおわれてはいない。おおわれていたとしてもそれを気にしないで入っていくような連中ばかりだ。

私達のホームルームをのぞいてみると、これは英語・数学の時間より静かなくらいである。朝のホームルーム、帰りのホームルームはないに等しくらいで、ただ議長「なにかありませんか」が続くこのごろ、朝の数学のテストとホームルームテストとで、このこ

とばもきかれなくなった。ホームルームで活潑な時という、席替えとか、レクリエーションの時等で夏休み、冬休みの生活目標とか学級のきまり等という、かりてきた猫同様で皆下をむいたきりである。

もうあと一しよにいれるのは数ヶ月しかなくなったが、いつまでもこの組での楽しい思い出を忘れないであろう。就職をする人も進学する人も。

三年 B 組の横顔

三年 B 組

このクラスの日を紹介してみたいと思います。まず朝は、必ず誰かが遅刻してくるのが原則のようになっている。みんなツンボらしく鐘がなっても知らん顔をしてストープにかじりついている。先生がくるとオリンピックに出てもいいぐらいのスピードでそれぞれ席についてすました顔をしているが、先生に呼ばれてゲンコを頂だいでしてこることもある。

そして朝のあわただしいホームルームが終わり、一時間目の授業が始まる。一・二時間目は、まだエネルギーがあまっているせいかあつちでベチャクチャ、こつちでベチャクチャ、三・四時間目になると、エネルギーがきれたせいか、おとなしくなる。がまんできなくなったものは、弁当のふたをあけたり、とじたりしておちつかななものもある。

いよいよ昼飯ともなると、みんなの顔がいきいきとしてくるのである。昼食の時は、席を自由にかえてもいいので、それぞれグループ

楽天的なクラス

三年 C 組

に別れて、おかすの取り合いをやっている。昼休みになると腹いっぱいになって遊びに行くもの、教室でストーブのまわりに集まってスターの話に花をさかせるもの、机にかじりついているもの、さまざまである。

そして五・六時間目は、腹いっぱい食ったし、適当に運動したのでみんなスヤスヤといねむりの時間となる。そしてホームルームテストの始まる二分前に参考書をあわてて読んで、一日が無事終わるのである。この紹介で悪い面が多いようだが決してそうではない。この前もA君が就職試験にパスしたと先生が言われた時、拍手をしたりするなど、じつになごやかなクラスだと思ふ。

勉強の面でも問題がわからない人は、わかる人に何回も聞きに行つて教えてもらつたり、このクラスのことをホームルームの議題にすると、ふだんお通夜のようなホームルームも一段と活気をましてきて、みんな意見をかわしあうなど、クラスのことになるとみんな、真剣になつて考へる。

それからこのクラスの特徴は、三つのグループに別れているというところである。一つはガリ勉とまで行かない勉強組、昼休みになるとたちまち体育館へ消えたり、ときどき奇声を発するアパッチ組、どちらにも属さない、独立組がある。共通して言へることは、みんなミュージックが大好きである、時々このクラスの迷歌手D君が奇声をあげてインチキ英語でビートルズの曲を歌っていることがある。とにかくこのクラスは、悪い面や良い面が十分あるクラスである。竹内先生を中心に、残り少ない中学生生活を、より良く、より楽しく生活していきたいものである。

「ジン」どたどたと、息も切れ切れにかけこんでくる。そのあわただしさと、打つてかわつて、ストーブを占領している連中は、悠々としたものがある。「先生がきた」この連絡とともにどつと席にいく、ちよつとしたラツシユである。やがて、我々の御主人「松井喜一」と呼んだら「ゴツン」とくるかな。

ともかく先生がはいってくる。

先生「成績カードを持って来たか。」「ああ、忘れた。」先生「このたからもの／＼と笑いながらいつものニューモアのある口調がとびだし、皆を笑わせている。先生が出ていくやいなや、「このたからものめ」と、先生の口調をまねて、皆をわかしている。これは、C組のニューモアのある場面である、このように楽天的なクラスであらう。

特色……運動・勉強とともに、大活躍……とは、どこのだれが言うだろうか。」といつたら、怒られるだろうか。運動はともかく、勉強は本望をとげるために、実力は、内にひめている。ではH・Rはどうか、「何か意見がありませんか」と議長の声だれも意見を出さない。「意見がありませんか。」A君は「おれには関係が何もない」といったような顔つきで窓の外をながめている。書記は何も書く事がないので、チョークを削っている。「ハイ」とC君がいった。「なんですか。」「腹へつた。」とたんに教室中に笑いがおこる。これがC組のH・Rである。

これは、最高の欠点であり、これからの課題であらう。しかしこ

の問題も、近頃は卒業が近くなってきたせいか、活潑に意見がでる。C組のほんとうの姿が今になって出て来たようだ。残りの日々を、松井先生を中心として、さらに団結を固めたいと思う。

ユーモアのあるクラス

三年 D 組

私達のクラス三年D組は、男子二十七人、女子二十人で構成されています。

人間は、十人十色といわれるように、私連のクラスにも、愉快な人、おこりつぱい人、おとなしい人、活潑な人、とさまざまな人がいます。すがみんな協力しあって、明るくユーモラスなクラスにしています。それではD組の長所と短所に分けて紹介しましょう。長所の一つとしては、「クラスの中でユーモアに富んでいる。」という事です。例えば国語の時間の場面、先生「本を読んで、だれだ、よまねえの。」A君「だめあるよ」などといつてみんなをわらわせます。又、まただれかが本を読んでいるのによけいな話をしていると、「ちゃんと聞いとれ、せつかく汗かいて読んでいるのに」などと先生をもいっしょになつてわらわせます。このほかにも、多くの長所があります。短所もけつこうあります。短所の一つとして、授業中のおしゃべりが多い、そして発表が少くない。

又、H・Rの時、発言が少ない事。これらをなくして、長所をのばしていくと、もつとよいクラスになるでしょう。この二年間みんな一致協力しあつてすごして来たこのクラスも、後三ヶ月で卒業です。

卒業という事は、残念な事でもあり又、進学、就職などと、社会人に一歩近づくという事は、うれしいことでもあります。残り少い日をおしみなくすごして行きたいと思ひます。

さわぐけど明るいクラス

三年 E 組

ぼくらのクラスが二年の時は、全校に名をとどろかせたG組でしたが、三年になつてからは名前のせいか大変イー組となり、クラスの順位もだんだんと上りつつあります。

そのE組の変つていふ所というのと、まずH・Rがあげられます。そのH・Rのやり方は前に作つてある五、六人のグループで話し合い、その中の一人が発表するといふやり方です。

今までのH・Rという全然意見が出なくてこまつた事もしばしばあつたけれども、この方法になつてから、H・Rは割合に活潑となり、他のクラスにもひけをとらないようになりました。しかし少々事はよくなつても、まだ二年の時の名ごりがなくなつたとはいへません。掃除用具をすぐ使えなくなつたり、床の下にごみを投げたりという物質的な物はあまりありませんが、このクラスはよくさわぐといふ事が残つています。

女の先生の時間うるさかつたり、廊下でたたむろするといふ事もあります。

また教室の中で追つかけてこをしたり、すもう、ボクシングのまねをしてあげくのはてには廊下を走り廻つて鉄のトビラに頭をぶつけて大きなコブを作つたり、やる事なす事がウルトラCのようなも

のです。

けれどもよくさわぐクラスは運動面においては活潑だという事、それはぼくらのクラスの男子においても例外ではありませんが、女子の場合はよくさわぐのに、なぜか運動面ではバツとしません。男子の運動というは二年の時のバトミントン一位、バスケット二位、三年生になつてからはソフトボール大会で一位となかなかの好成績をあげています。

ぼくらが初めて顔を合せてからもう、二年その間は夢のようにすぎてしまいました。その二年間を全体から見れば、運動面はいけれども品行はあまり良くなって、よく先生に迷惑をかけたクラス、というのがぼくらの三年F組のようです。

チャーミングなF組

三年 F 組

私たちのクラスは、たいへん明るくにぎやかなクラスです。担任はいかにも威厳ある英語の野々村先生です。一日の反省には必ず、「ベルが鳴つても席につきません。」「たいへん騒がしい。」の連続です。

もう卒業も間近に迫りそれぞれ受験・就職がまっています。だんだんクラスの雰囲気も変わり、つい先日先生から、「このごろやつと真剣みがでてきてたいへん落ちついた勉強ぶり」とほめていただきました。

クラスのなやみは、H・Rの時間です。議長の声で「これからH・Rをはじめます。」とかかると、A君の元気な声で「席かえ」み

んな、ワアと笑う。それもそのはず、H・Rのたびにといつていいくらい席かえが議題に出ます。先生は、「おまえたちはもう少し中学生らしい議題がないのか。」といつも言われますが、いぜんとしてありません。「席かえがクラスの趣味だなあ」などといつて笑われます。

次に私たちのクラスではあだなのついでにいる人がたくさんいますとても親しみやすく面白く、見るからにガツチリ形のデガちゃん、たいへんニューモラスなあんこさん・チャンコ・ガンタ・キャスバなど十人十色の人たちが集まり、毎日愉快にすごしています。

クラスの成績、スポーツを紹介しましょう。担任が英語の先生のせいか、英語の勉強には力が入るようです。けれども英語の時間になると、みんなは「ああ、英語か。」とがっかりしたようにいいます。先生がいかにめいので、この時間は特に緊張しているせいでしょうか。その現われは、英語の前の休み時間には、いつもわいわいさわいしている人でも真剣に勉強するので、よい成績です。

スポーツでは男子が運動会にみごと一位、女子もまけてはいられませんとばかり、バレーボール大会に一位をとり、男女とも協力精神を発揮しました。あと残り少ない中学生生活を就職・高校受験に全員そろつてバスできるように真剣に取り組んでいる毎日です。

フアイト

三年 G 組

フアイトがわがクラスの合いことばとも言うべきことばである。忘れはしない九月の校内バレーボール大会のこと。わがクラスが準

優勝したのだ。選手の目に光る涙、頬を紅潮させて抱き合う者、この喜びを生んだものをさぐってみよう。

わがクラスは学年で一番バレーボールが苦手だった。だがみんなの心はそんなことで負けたりしない。「どうしても勝ちたい。よしどんなことをしても勝ってみせるぞ。」そう誓った選手の心の中に「ファイト々」ということばが浮かんできた。「私達には「ファイト々」しかない、すぐれたわざなどないんだ。」そのことを胸に、朝は七時から、放課後は五時頃まで、丸い小さな白い球にみんなの全力を注いだ。「ファイトだよ!」「なにほやほやしているの!」「なに負けないぞ!」友をそして自分を励ます声もかれ、みんな心にむち打って練習した。いままでは見られなかったファイト、団結、そして負けるまいとする根性、それらが準優勝という大きな勝利を生んだのであろう。たとえ優勝はできなくともみんな満足していた。何事にもかえがたいものを見つけたような気がしたからだ。このように、根性やファイトでは絶対負けないクラスなのだ。又、スポーツが大好きで運動会などでは必ずといってよいほど上位である、その時の賞状十二枚というのが自慢の種である。では、毎日の生活について書いておこう。

クラスのトレードマーク、それは男女の仲がたいへんよいことである。だから、仲が良すぎてけんかをすることもしよつちゅうである。でも、すぐに仲直りするからだいじょうぶ。

おもしろいあだなを紹介しよう。

ダンゴ・デメ、極楽・ヘモリンド・うずまき・ズンドウ・モヤシ
・ピーナツ・魔女・悪女・酋長・ワツバ

全部書いていたら最後まで続くだろう。一人当たり一つではないのだから。しかも呼ばれたら、平気な顔をして返事をするのだから

らまったく、平和なクラスである。担任が小川先生であるせい、か、じょう談がうまい。まん才はとびきり優秀である、まん才家になつてもだいじょうぶな才能を持っている人だつて少なくない。それだから、いつも笑いがたえない。それに「学年中で一番幼稚なクラスだ」と先生がなげく。それが良いことなのか、それとも欠点であるのかは、わからない。きつと両方なのだろう。

この楽しい生活もあとわずか、バレーボール大会で発揮したファイトを忘れず、又団結の精神をいかして、最後のしめくりをりっぱにして、学校と別れをつけたいと思っている。



職員隨筆



釣りと私

坂 牧 達 夫

春から夏にかけて、ヤマノ、イワナ、秋から冬にかけてカレイ、アブラコと、今年もよく釣り歩きました。

十二月十日に矢不來のカジカを釣りにゆき、肉屋でグループ一同となべを囲みながら、それぞれの自慢話をやりとりして今年の竿おさめとしたわけですけれど、年の瀬もおしつまった此の頃でも、窓から見える住吉の海が霽く風いでいる日は、腕がなるといふのでしようか、どうも落ついて仕事が出来ません。そんなに釣りに出かける私にむかって「さぞ獲物をとってくだらう」「魚屋から買ったことないだらう」と人は言いますが、今年はまだ良く釣れたという日はありませんでした。川は、大てい目ぼしいところにはバイクや自動車がおいてあり、川岸に足跡がついていたり、ひどいものになると投網や薬物であらしてたり腹立たしい思いをしたことが多くありました。海は氣候異変で海流や水温の異常さがプランクトンの繁殖を変え、アブラコやソイのような根魚のよりつきまで変えた

のでしようか、さっぱり常識的にはいかなかったようです。それでも私は、私なりに満足な釣りをしてくると「一匹二百円にもつく」などといわれながらも楽しく嬉しかったのです。

私は、どちらかというと、海釣りの方が好きです。ナラ、トチ、ブナなどの広葉樹が原始林のように森厳な様をみせている幽玄の沢を歩いて、冷たい水の中から溪流の女王と言われるヤマメ(ヤマメ)を釣り上げた時の背すじを走る戦慄のような感じは、忘れられない溪流釣りの醍醐味です。しかしそれよりも捉えどころのない茫漠とした開け放しの海にむかって、小さな餌を一投するのは、はなはだ頼りない感じがしますが、陸に住む人間とその二倍以上も広い海に住む魚とのやりとりが、川釣りよりスケールの大きな釣りの味となつてひきつけるのです。

海の魚は、岸壁でつれるチカやフグに至るまで、その日その日によつて餌付きが異なります。昨日つれたといつても今日はまるで駄目だったり、その原因はいまなお私も陸棲のものには不明なものがあります。汐まわりだの、水温だの、濁り方だの、プランクトンだの、海の魚を釣り上げるには調べてゆく要素はなはだ多いのです。それを調べて、そして今日は釣れるぞ、という期待を持つことが海ぶりの楽しさの一つなのです。

釣り人はのんびりしていて自分の性にあわない、と人はよく言いますが、私自身考えてみて釣り人ほど、せつかちで、がめついのではないかと思うことがあります。釣れなければ今度こそ釣つてやるぞという意が、何日も何日も休みになると竿とリュックをかついで家人を喚かせるのです。

最近釣りブームとかで、函館の釣人口も二千人とか三千人とかい

います。生徒たちの中でも趣味に「釣」とかく者は、クラスに必ず四、五人はおります。こんなに釣りがブームになったのは、単なる一時的な流行だとは私は思いません。趣味や、レジャーとしての釣りはアメリカやイギリスのような高度の文化生活をしているところ



では盛んで、低開発の国にはあまりそういうものがない、ということとを考えると、釣りは昔のような単なるひまつぶしの趣味ではなく、今日機械文明や合理主義といった文化生活の中から生まれた必然的要素をもったもの一つではないかと思われるのです。

最近漁家がさっぱり魚がとれず、零細漁民がふえて来ました。そういう漁村を釣竿をかういで通るのは気がひ

けるといふ釣友がいましたが、最近の不漁の原因の一つに釣り人たちが磯を荒らすから魚がとれなくなったなどと本気で考えている人があるのでしょうか。磯魚は、どんな方法で、どんなに獲っても、少しも漁民の生活を向上させるものにはならないし、国家の収益とな

るものでもありません。国は零細漁民を救うには、もつと大きな手をうつべきだし、磯魚に対しては、国民のレクリエーションとしての利用価値に目をむけるべきだと思ふのです。ともあれ釣りそのものの持つ魅力が多くの人々の要求をみたしてくれるのです。

でもこれから釣りをやろうかなと思っている人には、これだけは言っておきたいのです。釣りはやはり趣味（レクリエーション）です。だから消費です。だから損得を考える人には釣りはすすめられません。獲物の価値と経費をくらべ、うんぬん——、そんなことを考える釣りはおそろくないでしょう。釣りをするそのことに、レクリエーションという大きな取獲があるからです。獲物そのものをうんぬんすることは損得をいうのではなく、レクリエーションとしての取獲をよくばることで、趣味の純粋性は失われはしないと思ふのです。

新年には、一年の釣り計画を立てることが、楽しみの一つで、忙しさをさらに忙しくしているのですが、それで、うれいのです。

奥尻島旅行記

西谷 富士雄

昨年の夏放送教育研究会に招かれて、最近観光地として急に有名になった奥尻島に出張したのでその旅行記をお目にかけたい。

簡単な旅行具と録音機を肩にして江差に着いたのは七月六日の昼

すぎ。生憎の天候で霧雨模様、棧橋に立つと二、三隻の漁船が「ボン、ボン」と機関の響きもかろやかに帰港しては獲物の水揚げをしていた。また左側に鷗島が浮かび、右側は乙部村に続く海岸が霞んで見える。

江戸時代には和人やアイヌ人の陳船で賑わい「江差の五月は江戸にもない」とまでいわれたこの港、もの悲しく鳴きながらとびかう鷗が昔の榮華を物語っているかのようであった。

私達は道南海運の営業所で乗船名簿と交換に切符を求める。やがて出帆だ。テープを投げける者は勿論、見送りの人影一つない静かな船出である。会社の心づくしであるう、岸壁のスピーカーから別れの曲を流して旅情を慰めてくれた。

一三〇余トンの貨客船三島丸は先刻まで運航のあやぶまれた日本海の荒波をけたて、八・五マイルの速力で、六〇キロの船路を北西に進路定めて進む。

出帆の汽笛やら、エンジンの騒音などテープに納めてからブリッジに船長を尋ね早速マイクを差出す。船長は私の顔とマイクを交互にみつめるだけで質問には答えてくれようとしめない。よくきいてみるとこの奥尻航路に移ってまだ三日目のことでのこの航路については何も知らないというのであった。そのうちに船長も馴れたのであろう、しきりにタバコをすゝめながら海の漫談を話してくれた。

面白さにつり込まれているうちに船酔いを感じてきた。船体ははげしく左右上下に大きく揺れる。船に弱い私は録音機をかゝえてよめきながら船底のうす暗い客室にのがれ、帰山先生にもらって来たトラベルミンを多目に飲んで横になると船縁をたたく波音が一層はげしさを加えた感じがする。喉元をなまつばがいそがしく往き采

し、なんともたえようのない心細さが迫ってくる。

汽笛の音で目を開くとようやく長かった三時間半の荒海を、無事に乗り切り奥尻港に投錨しようとしていた。あゝ助かったという感じが心の奥底から湧いてくる。

港のすぐ後には一昨年の大火で焼けた市街が立派に復興し、新しい家の軒並が整然と連らなっていた。出迎えの方に案内されて村営の観光ホテル洋々荘に着くと、まだ陰の香も新しい建物だ。各部屋には宮津、稲穂、初松前（はまつまい）などと村内の地名がつけられており、窓辺に静かな波がくだける水ぎわの別天地であった。このホテルは三年前来島された高松宮ご夫妻をお迎えするため新築されたものだそうで、私達もこゝで宮様の気分を満喫できた。

やがて大広間で明日の研究会の打合せが始められた。地元の方方は非常に熱心に日程やら会の運営計画など説明されていたが、私達函館からの一行は船酔いに青ざめた顔でそれどころではない。

間もなく村役場の上野助役さんを始め有志の方々が歓迎の挨拶においでになった。全く国賓なみの待遇である。そこで再び放送記者よろしくマイク持参で助役さんにインタビューする。

奥尻とはアイヌ語の「イクツンシリ」がなまったもので「向いの島」という意味だそうだ。周囲約八〇キロ、面積一四三平方キロ、人口約八千、村民の八〇パーセントは漁業である。おもな海産物はいか、さんま、ほっけ、あわび、わかめなどだそうだ。

そのほか昭和三八年五月の大火の模様、そして秋に襲った集中豪雨の被害など話はずきなかつた。村の復興は約九〇パーセントという進み方で、この十月に村をあげての復興祭を行うとのことである。これは村理事者の適切な指導と、島民のたくましい根性による。

よるもので、ただただ、驚嘆させられるだけであつた。

また昨年春から観光奥尻に客を招くため鉄道債を村が負担し、函館市と協力して準備おくしりを一往復江差線に走らせ、一泊観光を実現させるとともに、島内一周の観光バスも入れたとのことである。そのほか飛行場の計画もあり、近い将来には日帰りも実現しそつである。

明けて翌七日は赤石小学校を会場とする全村の研究会の当日であつた。朝日に照り輝く大海原のよく見える部屋で朝食をすませて赤石行きバスを待つ。村内の学校が臨時休業のせいか、朝八時というのに早々と洋々荘前の浜に二、三十人の子どもがやって来て、泳いで焚火にあたってウニやガゼ取りに興じていたのに驚かされた。

奥尻の市街を通り過ぎ左手の海岸にひとときは高くそびり立つ鍋釣岩の奇岩を眺めながら十五分ほどで赤石小学校に着く。簡易水道なども設備されたブロック建の立派な校舎であつた。こゝでテレビの学校放送をつかった小学四年の社会科の学習を參觀する。校長の久光先生はテレビやラジオを利用して行つた授業の目的をこう説明された。「この学校の生徒の大部分は修学旅行まで島外に旅行したり、汽車に乗つたり見たりできないような恵まれない状況です。不便なこの島でも勉強にテレビやラジオの特性を利用すれば函館や東京と大差のない経験と情懷豊かな教育ができます」ときっぱり言い切る、実際授業を見せてもらおうと函館の生徒とちつとも交らない活々とした勉強ぶりにそれがよく証明されていた。

研究会が終つた後、村役場のご厚意で春開通したばかりの観光バスで村内を案内してくれた。ガイドの青坂さんは赤石校の卒業生

で、函館市交通局の長い経験をもつベテランである。母校のお客を案内するとあつて一生懸命、私達は営業開始以来二番目の客に当るそうだ。青坂さんの話ではまだ日が浅いので珍しく、最初村内の定期バスに乗つてガイドの練習を始めたなら、これを見たりきいたりしようとする乗客が急にふえ、そのうえガイドの名調子にさそわれ、ついつうっかり乗越しする者までもでるといふほゞえまじい風景がみられたそうだ。

全コースは約二時間半、景色がとてもよく私達目を充分楽しませてくれたが、道路舗装の不備なのが少し気になった。でも近々工事が進められる計画だそう。この辺で村内の名勝二、三を紹介しておこう。

七日には島の北端稲穂岬に案内された。そこには燈台があり、下の海岸は「さいの河原」という霊場である。訪れる人はなき人の供養のため小石を積むならわしがあり、無数のケルンが残っていた。夕暮せまる川原で小石を積みながら耳にした燈台の、ロマンチックな霧笛の響きはまた格別の風情を添えてくる。

翌八日は島を去る日であつたが、午後二時の出帆なのでそれまで昨日に引続いて島の南部青苗港の視察に出かけた。そこは島の商港として発展した所で漁船の出入も多く、相当歴史は古いようだ。緑の丘に白塗りの青苗燈台、その傍にそびえるロータリーピーコン、そして岬の先端に立つ徳洋記念碑。

この碑は明治十三年七月、故有栖川宮熾仁親王がイギリスの軍艦アイオンジュニク号に乗つて訓練中、濃霧にあやまって青苗岬に座礁した時、青年親王自から島民と協力されて救助されたさうであるが、その功績を讃えて建立されたものだ。昭和三十七年の夏高松宮

をお迎えして徳洋記念碑建立八〇周年記念式典を盛大にとりおこなっている。

記念碑の見学後、奥尻島の裏側で風光明媚な無縁島に向う。このコースは草原がはてしなく続きサイロが点在する酪農地帯で、これが奥尻島内の一部かと目を疑うばかりだ。無縁島のある藻内の海岸は静かな砂浜で海面に美しい鳥影をうつす格好な海の自然公園である。夏休みにこゝでキャンプをした者は誰でも浦島太郎のようにその素晴らしさに酔うであろう。

予定された日程を全部終り奥尻港から再び船の人となる。往きとちがつて帰りの波止場は上野助役さん、教育委員さんそれに赤石校の先生方、ガイドの青坂さん、洋々荘の方々の大見送りで見送られる。「さようなら、さようなら」の嵐の中に五色のテープがゆれる。別れを惜しむように長く尾を引いた汽笛が鳴って岸を離れる。そして真白い軌跡を後に奥尻の島から刻一刻遠のいてゆく。

あれからも半年すぎた今も、あの三日間の楽しかった思い出が脳裡にしっかりと焼付けられている。私はこの旅行記を通して諸君に若々しい道立公園奥尻の紹介旁々この出張中終始ご厚意をおよせ下さった島民の皆様へ深くお礼を申し上げて終りとする。(完)

交遊抄 (一)

— 忘れ得ぬ人々 —

竹内巖太郎

これといって人に自慢するものも、見せびらかす何物をも持たな

い平凡な人生を歩む私にとって、もしもその人たちの許しを得ることができるのなら、すぐれた友人を心の財産として持っていることを、誇りとして挙げたいと思う。

三十余年の歳月の経過の中に、私の周囲にも多くの人たちが現われそして消えていった。親疎の程度はちがっても、その多くの人たちが私にとって大切な人であり、私の今日もみなこの人たちのおかげであると思えば感謝を忘れるわけにはいかない。

けれども人情の常として自らそこに遠い人と近い人の区別の出来るのは避けられない。友人は求めて得られるものかどうかはよくわからない。私の場合は特に求めたというわけでもなかったように思う。ただ同じ教室、同じ職場、同じグループの中にあつて、特に私と彼とが何となく気があい、交際を続けることになつたという所に、何か人生の不思議と微妙さを感じないわけにはいかない。もしこれが偶然というものであるならば、天の配剤の妙にだた驚くばかりではないであろう。

私は今、私の友人について語ろうとしているのであるが、つたない筆の運びはどれほど彼の面影を伝えうるかどうか甚だ心もとないものがある。しかし仮りにもし私が文章の達人であつたとしても、十分というわけにはいかないであろう。友情を語るためにはあまりにも力の無いものだからである。

船木勝馬先生

先生を友だちの中に数えあげることが、非礼なことであるのかも知れないが、私の大学時代の担任教師であつた船木勝馬先生を、私は先生として尊敬していることはもちろんであるが、それ以上に友

情の相手として、考えているのである。

東洋史というものがどういう学問であるかいかいもくわからないう入学した私は、史料が全部漢文であるというごくあたりまえのことを知るに及んで大いに僻易し、とても卒業できそうもないと悲觀したものであったが、専攻の学生が僅か三名であった為、手にとって教えて頂くことが出来たのは何ものにも勝つての幸せであった。ある時は他の学生が欠席したため、教師一人生徒一人というぜいたくな授業もあったが、そこに自らの交流が生れてくるのであった。

卒業学年の夏、先生の奥様の実家が九州の福岡であったため、すめられて九州に旅行したことがある。先に長崎に行き帰りに福岡に寄った。だだびろい博多の駅に降り立ってうろ／＼している時、「竹内君」、「竹内君」と先生は浅黒い顔に人なつっこい笑顔でたたえて迎えてくれた。

お宅に衣装をといいた後、歴史のふるさと大宰府、菅公の流在跡、元寇を防いだ水城の跡、箱崎八幡宮など、歴史家らしく豊富な説明を下しながら案内して頂いた。帰りは耶馬溪から別府温泉に出たいという私の希望で、出発は朝の一番列車でなければ間に合わず、早朝五時の汽車に間に合わせるため、先生夫妻は夜中から起きて支度して下さった。人影もまばらな朝の博多駅を先生に見送られて発車した時、良い先生を持つ身の幸せをしみ／＼と感じたのである。

その後卒業してから八年の間、上京する時は、たび／＼訪れて旧交をあたためているが、かざり気のない善意に満ちたお顔を拝見しお話を拝聴するたびに、湧き起る敬愛の情を抑えることができない。又、これは私一人の思いではなく、先生の教えをうけた学生全ににあって共通の感情であらう。

先生が大学や歴史の学問の世界にとって大切な人であることはもちろんであるが、私は自分のために先生に何時までもお元気であられるよう祈っているのである。

島田永信六段

函館市堀川町にそは屋長寿庵を営む島田永信氏は、将棋アマ六段、第三回全国アマチュア名人として、つとに世に知られた方である。

私の将棋歴は長くすでに二十年になろうとしているが、氏との交りはその始りの頃からであるから、氏との交遊はそのまま私の将棋歴にもなっている。

私たちの若い頃、青少年ばかりで組織していた青年将棋研究会というものがあつた。私をふくめて有段者も相当数いた。皆それ／＼天狗であつたのだが、当時の島田さんには、※(1)平手ではもちろん、※(2)大駒を引いてももらつてもなかなか勝てなかつた。「私に大駒で勝てないような者が、初段二段などと大きな顔をされては段位が泣く、いっそ返上してしまつたら」と言われて、研究会員の間に物議をかもしたことがあつた。その時は大いに口惜しがつたのであるが、将棋のように実力のはつきりした世界にあつては、段位は必ずしも実力のメドにはならない。段位を正味通り維持するためにそれは相應の苦勞が必要だということを、現在の私は痛切に感じさせられているので、氏の昔のことは有難く思い出している。

趣味の友ぐらい良いものはない。そこには年令職業身分などといふ一切の面倒なものを離れ、また利害の衝突することもなく、共通の楽しみを分かちあう喜びだけが存在するのである。

将棋指しとしての私の友人は数多いが、※(3)二上君はともかく、その外では島田氏が私の最も尊敬し、又、親身の忠告と支持をあたえてくれる有難い友人である。私も将棋指しである以上、アマチュア名人・王将を志して努力を続けているのであるが、生来の鈍才は如何ともなし難く、事と志の異なる悲しみを毎年続けている。このような私を氏は常に、「君には天分がないとは思えない。」と励ましてくれる。これがひいきのことばであることは、誰よりも私自身が十分に知っているのである。しかし、またこれによつて私がいざい分励まされ、牛の歩みとはいいながら少しづつ強くなっているのは事実だし、「あと十年もすれば」といううぬぼれが、あながちわいてこないでもないまでになつたのは、ひとえに氏のおかげである。私の現在における人生最大の望みは、一生の中一度でもよいから、名人王将のタイトルを握り、長寿庵主人譚製のそばを腹一杯食べたいということなのである。

さて、氏と私との間には一つの約束がある。それは私が死んだ場合のことであるが、家人には駒と盤を棺桶の中に入れてくれることを頼んであり、氏には日本将棋連盟函館支部葬の葬儀委員長になつてくれということである。私もまだ老いたりとはいえ三十代であるからまだ葬式の話は少し早いようであるが、人の運命は明日にもわからない。将棋の勝負にも ※(4)とん死ということがあるから、あながち早すぎる約束でもあるまい。将棋界のためにも、また私の約束実行のためにも氏にはぜひ共長生きしてもらわなければならぬ。氏の長寿と店の繁盛を切に祈るきょうこの頃である。

賢兄 長谷川 洋

前述の二人の方は友人と呼ぶためには、私の方が一歩おそれいら

なければならぬ立場の人であり、一応の教語を必要とする人なのであるが、長谷川君の場合は文字通り、「君」「ぼく」の間柄であり、中学時代からの交友が今日まで続いている竹馬の友である。

私が東京に遊学していた頃、彼も書家たらんと志して、印刷所に勤めながら苦学を続けていた。時々下宿を訪ねると三疊の部屋一杯に妙な文字が天井からぶら下っていた。

彼は私と違つて学問というものにも興味と熱意を持っていた。書をやるかたわら、常に読書の努力を惜しまなかった。それで大学に入つて勉強したいという希望を持ち、私と同じ東洋大学の国文科に入った。従つて私とは中学(高校)も大学も同窓になつたわけである。

生来純良な魂を持つ彼は人の言を疑つたり不信を抱くということあまりなかつた。大学の第二外国語に何を選ぶかというような大切な相談を私に持ちかけたことがあつた。私は自分がドイツ語であつた関係上「ドイツ語が良い」と答へたら、すぐそれにきめて字引探しに本屋を訪ね歩き、数ある字引の中、私のすすめるものを何のちゆうちよもなく購入するのであつた。だから彼が卒業後教師という職業を選んだことは賢明な行爲と言えよう。

私が卒業する年のことである。もう勉強する部屋もいらぬから部屋代を節約しようというわけで一ヶ月ばかり彼の部屋にころげこんだことがある。何しろ三疊間なので大の男が二人寝るためにはちよつと狭い、部屋一杯にふとんを敷きまん中に電気あんかを置き頭を両側にむけ足をつきあわして寝たのである。私は卒業がきまつたので至極のんびりしたもの、昼は盛り場をぶらついたり劇場をのぞき、夕方に帰つてくるとコタツに入りながら新聞や雑誌ばかり読ん

でいた。一方彼は朝から晩までノートに没頭するものすごい勉強ぶりだった。

焼きいもが好きで一詣に銭湯に行った帰り屋台売りの石焼きいもを買って食うのが共通の楽しみになった。運動は日曜日毎の洗濯で一週間の汚れ物をタライでこし／＼やるのは結構な労働であった。不平や不満の少ない彼であったが、電気洗濯機のないのをタライを出すたびにこぼしていた。

卒業した後、私は帰函して教師になったがそれから二・三年して彼も卒業し、何になるのかと思つたらやっぱり高校の書道教師になった。寒がりの彼は温い静岡に行きたいというのが念願で、ずい分口を探したらしいが、結局思わしい所がなく、事志と違う寒い青森県弘前市に勤めることになった。それでもまだ南に行きたいという望みは捨てず先頃訪ねたら、秋田・山形・福島というように毎年転任して少しづつ南に行きたいねと笑っていた。

敬愛おくあたわざる賢兄の宿望が達せられるよう私は切に祈っている。

交遊抄の筆を繰ることは私にとっては楽しいことである。まだ語るべきこともあり、また語らなければならぬ人も数多い。しかしあたえられた紙数もすでにつききた、あとは後日また機会があればのことになしよう。

ほんやりと雪の窓外を見ながら目をとじるとあとからあとからなつかしい顔が浮んでくる。みんな善意に満ちた顔ばかりであり、元気でやってくるかいとはほえみかけてくる。私の不行届からずい分めいわくをかけたたり、失礼をした人もいるけれども許して下さいと私

はつぶやく。たまには悲しい交遊の思い出もあり、語りたくないものもある。けれどもこれも大切な思い出だから、何時までも心の小箱の中に大事にしまっておかなければならない。
ゆうゆうたる川の水が如く流れ去ってやまない人生の旅路に、珠玉の友人を過去と現在そして未来にわたって持ちうる身の幸せを私はいつも心の中にあたため、感謝しているのである。

註 (1) 平手将棋の勝負の形式で、お互いが対等で戦うこと

(2) 大駒を引く、将棋の勝負で、相手との力の差がある場合、強い方が駒を落すことを駒落ちと言ひ飛車、又は角を落すことを大駒を引くと称し、大駒落ちになれば、五段から七段の差があると言われている。

(3) 日本将棋連盟棋士、八段

(4) 将棋の勝負で、大丈夫だと思つている王様が、見落して詰んでしまうこと。



論 說

流行について

三年 金谷 芳江

皆さん、かぶと虫の複数形を英語で何というか御存知ですか。新聞やラジオ・テレビでヨーロッパ・アメリカに爆発的な人気を呼んでいる四人組歌手、ビートルズです。

マスコミの発達した今日の社会において、流行というものがいかに私達の生活に大きな影響を与えているか、今から私はこの流行というものを私達中学生生活に結びつけて考えて見たいと思います。

現代の社会はあらゆる面において急激に進歩し、めぐるしく変わっています。これは、人間生活のめざましい進歩であり、言いかえて見ますと時代のスピード化といえるのではないのでしょうか。全てが電化・機械化されて町にはインスタント食品があふれ出、すべての生活が大変合理化されてきました。この反面、音楽にしても、毎日テレビ・ラジオから流れ出るやたら急テンポの音楽やジャズ化されて聞くものに何の意味も理解できないような歌。服装にしても、人は「今年の流行色は青だ」などといわれると、たちまち町には青い服がはらんする、といったような有様です。何年か前に流行したフラフープやだっこちゃんなども一年もたないうちに消え、今では殆ど見うけられませんが。

フランスは世界の流行の中心などといわれても、同じ家具を百年以上も大事に使っていたり、日本人から見れば旧式だと思われる電

気製品を大切に手入れして使ったりしている反面もあるという話をきけば、私達にも何か考えさせられる点があると思います。

それでは、私達中学生の学校内外での流行の影響はどうでしょうか。まず男子の学生服姿を見ると、ズボンの巾が上から下迄同じであるストリートズボンや下が広がって西劇にでもでてくるようなラッパズボンをはいっている人が大勢います。つい先日、耳にした会話によると、自分で学生ズボンを縫って細くつめるのだそうです。そのわけは「お母さんに頼むとみつともないからといって、つめてくれないのでこっそり自分で縫うのだ。」と話していました。こういうことが今後どんどん校内に広まっていったら、これも家庭科の勉強の足しになるだろうなどと、笑ってすませるでしょうか。もう一つ、私の親せきにおきた夏休み中の出来事を例にとってみましょう。ある高校生が旅行の途中、れのラッパズボンのすそをボサボサにしたのをはいてお婆さんの家に立ちよったところ、夜寝ているうちにお婆さんが「本当に可哀そうにお母さんがかわらないでこんなボロボロのズボンをはかせて」といってこっそりすそを切つてつくろつておいたのだそうです。

後でわけをきいたお婆さんが、あきれたり、気の毒がったりしたという話は余り「カツエイ」ものではありませんね。又男女の髪形も流行歌手をまねたり、女子も派手な服装をしさか毛をたてて喜んでいするなど、私達の関心が何か肝心なものからそれている様な気がするのは、私一人でしょうか。

今私達には、はつらつとしたエネルギーがあふれています。このような年代を大人の流行の後を追いつながら漠然と過している友達を周囲に見出す、時自分への戒めとして大いに反省させられるこ

とがあると思います。二度と来ることのない中学生生活をもつて、自分をみつめて私達中学生でなければ感じることの出来ない何か、今しなければならぬ何かを見つけていこうではありませんか。

例えば一つの物事を深く掘り下げて静かに考えて見たり、落ついた実のある読書をしたり、友達と議論を戦わせてお互いの考えや物の見方を知ること等は、どれ丈将来の私達の人間形成に役立つことでしょうか。皆さん、つまらない流行よりも、もっともっと大切なものに私達のエネルギーをそそぎこもうではありませんか。

交通事故に思う

三年 山道美幸

あの澄みきった青い空とそこに横たわる白い雲とのコントラスト。そんなきれいな自然にかこまれて我々人間は生活している。ところが、文化の発達とともに乗物などの機械類もめざましい発展をとげ、ふえてきたせいか、毎日の様に事故がおこっている。

従つて前のことから、我々の生活は機械によってなされているといえよう。又、事故でも特に多いのは交通事故ではないだろうか。これは死亡率の面においても、病気の次につぐたかさである。

さて交通事故と一言にいつても「自分の不注意からおきるもの。」と「他の者から被害を受ける場合」とに、分けられるのではないだろうか。たとえば、信号が赤なのに平気で道を渡つたり、はたから見ても全くはらはらさせられる。これは意外に多いのではないだろうか。町でもよく見かけるが特に、若者や老人に多い。だから車が、きたとしても車の方が止まらなければならない結果に

なってしまう。なぜなら通行人をはねてしまうからである。

だが、いくら歩行者優先とはいえどこれは、余りにもひどすぎはしないか。我身を死神に、自ら与えようとでもしているみたいである。車だって時には、止まってくれるのだってあろう。しかし止まらないのだってあるのだ。もし車が通行人をはねたとする。そうしたら、必ず車の方に責任がかかるであろう。それはもちろんだとは思ふ、運転手の前方不注意が原因であるから。だが、いちがいに車の方を悪いとしてしまうことができるか。それは歩行者も考えなければならぬことだと思ふ、事故をおこさない為には、まず自身から注意をおこらない様に心がけなければいけないだろう。

又、交通法規を無視して自分だけの快感をみたすために、制限キロ数以上のスピードを出したりするものがめだつてきている。やはりオートバイを運転する若い人に多いのではないか。しかし、これは車を運転する人にも言えると思ふ。若い人ならだれでも、スピードにあこがれると思ふ。だが認識のある人なら、そのあこがれを、おさえることもできよう。

又、それとはちがうがお酒をのんで運転したり、いねむり運転をしたりして事故をおこすというケースも少なくない。毎日新聞を見ると、六面に5、7行くらいで、小さな場所に交通事故のことがかかれている。「どこどこで、だれだれさんの運転する車と、どこどこ、だれだれさんの運転するバイクとがぶつかり、だれだれさんは重傷をおきました。」

原因は、だれだれさんのいねむり運転によるものと思います。いつもこの様なことばかり。必ず、二・三件はこの様なかき方で、交通事故のことがついている。私は残念だと思ふ、なぜなら、たと

えは「殺人」とか「何々が値上がりした。」とかいう記事だけが大きく紙面上であつかわれ、交通事故は、ほんのおなぐさみ程度しかあつかわれていない。

これでいいのだろうか、交通事故だって一つの事件であり、又「殺人」というのも一つの事件である、それなのに我々に直接関係している交通事故を、少しかあつかわず「殺人」とか、余り関係のないようなものが大きくあつかわれている。それだけ交通事故は毎日多いのだ。だからあつかっているうちに、いやになってくるのではないか。もし、そうであれば、いや絶対に交通事故を少しでも少なくしていかねばいけないだろう。

今のままでいくと、毎日交通事故のおこるのが普通になっていくのではないか。そうなったら我々は、毎日をおちおちとくらしてはいけないだろう。だから自ら気をつけ交通事故を少なくしていきう。

民主政治

三年 野呂 美和子

民主政治とは「国民に参政権がみとめられ、言論・集会・結社の自由がゆるされ、国民の意志が政治のうえに反映している政治を言う」とある本に書いてあった。いわゆる「人民の、人民による、人民のための政治」であるとアメリカの奴隷解放者リンカーンは言った。

日本も幸なことに大日本帝国憲法とは違ひほんとうに民主的な日本国憲法を、私達の祖先先輩、又父や母が作り上げて日本の民主化

は拡大されてきた。私達にとつては最も住みよい、社会になったわけである。

しかし、そういう社会になるまでに、どんな人がどんな苦勞をして、どんな方法でそれを、獲得したのでろう。自分の命を犠牲にして、戦った人もいただろう。血をながした人も、いただろう。又言論が自由にならず獄室で一生を終った人もいたにちがいない。父を、子を失った人が何人も……自由を求め、平等になることを願った人々の気持、ほんとうに口には言い表わすことができないくらい努力をしたのだ。子供や将来生まれてくる人々のために自分の最善をつくして貢献してくれた。私達は感謝するとともにそれを確保し、その内容を深く理解するように努め、よりいっそう発展するように努力することが私達の義務ではないだろうか。

今までに述べたように私達は理想的民主国家をもっていることを誇りとし、生活に結びつけていかななくてはならない。そのために、中学生である私達は、自分達の将来を、よりよい民主国家として発展させるには、学校生活でのH・Rや生徒会活動にすんで参加し、お互いの意見を討議し合つて、ある事がらを決め、それらを守り抜くなどというように、将来、民主政治に参加できる態度を養うことが大切だと思う。H・Rにおいて、自分の意見、良いのも、まちがっているのもあるが話し合うことによつてまちがっていれば、正しいのに改良されて行く。

したがって私達も小さな民主政治を行なっているのだ。だから生徒活動の時間もとても大切に、有意義に使わなければならない。しかし、そうわかつていてもなかなか自分の主張を述べることができない人もいる。そういう人は思い切つて発言してみることだ。

すると楽に言えるようになるであろう。

何事も民主主義の精神に反しないように。お互いに注意し合つて将来、いや現在を明るく楽しく過ごしていこう。

勉強と試験

三年 川浪 多万恵

私は試験の前の日など、勉強がいやでいやでたまらなくなる事がある。そんな時いつも、「勉強はなんのためにするのだろう。なぜこんな試験なんてものがあるのだろう。」と考える。この問題はともむずかしい問題だと思う。しかし私は私なりに考えて、勉強というものはこうあるべきではないだろうかという意見はもつていゝる。それを、これから述べたいと思う。

私達はなぜ毎日、いやいやや学校へ来なければならぬのだろうか。勉強するために。それではなぜ勉強しなければならないのだろうか。それは生活を有意義に楽しくするためだと私は考える。しかし、今の私達は勉強し試験ではないだろうか、私を例にすると、試験の前だけ一生懸命勉強するが、そのほかは宿題程度で気がむくと勉強するだけだ。いや、ふだんから勉強している人でも、やはり試験のためではないだろうか。

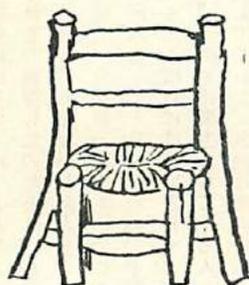
しかし、こんな勉強のしかたで、ほんとうに生活に役立つのだろうかと疑問を持たないわけにはいかない。役に立つといえ、高校、大学、一流会社のコースにのて、お金がたくさん入る生活を目ざすということではないだろうか。

今の社会ではそうすべきなのかもしれない。良くはないとしゅう

分すぎるほどわかっても、どうすることもできない。試験の点数が悪ければ、高校へ入ることも、大学に進むこともできなくなるのだ。試験のための勉強、それでは、試験の目的はなんだろうか。自分の力を試すためだと私は思う、自分の力を試すものに、どうしてこんなにも苦しめられなければならないのだろうか、それは、私達が試験というものによつて、しばられてゐるからではないだろうか。

もちろん、これは私達だけの責任ではない。先生方にも、社会にも責任はあると思う、しかし、私達自身がこういう考えを改めなければ、どうにもならないのではないだろうか。

勉強は試験のためにするのではなく、生活を有意義に、明るくするためにやるのだと思う。つまり、勉強し試験ではなく、勉強し生活であるべきだ。



詩

覚えていてねお母さん

三年 福島典子



覚えているお母さん
 遠い遠い昔のことを
 私がまだ幼かった頃のこと
 お母さんの背中に負ぶさって
 眠っていたあの日のことを
 でもね覚えていてねお母さん
 いつかきつときつと
 私が大人になったとき
 お母さんを背負って
 名所見物をしてあげましょう。

いつかきつときつと
 私が大きくなったとき
 お母さんと背くらべをしながら
 遠い昔のことを思い出しましょう。

いつかその日が来るまで
 覚えていてねお母さん。

雨の音楽

三年 野呂美智子

ピン ポン ビチャ
 雨がかなでる楽しいメロデー
 ビン ポン ビチャ
 てるてるぼうずも踊りだす
 ビン ポン ビチャ
 私もつられて踊りだす
 ザー ザー ザー
 外は雨のコンサート
 ザー ザー ザー
 風といっしょに窓たたく
 ザー ザー ザー
 花もいたそうに泣いている

ピン ボン ゲツク
 かえるが指揮するオーケストラ
 ビン ボン ゲツク
 てるてるぼうずも聞きほれた
 ビン ボン ゲツク
 暑い真夏にわか雨

一本の道

三年 和田潤子

一本の道 私の歩いた道
 小石につまずいて

ころびそうになった時

おこしてくれた

暖い友情の手

一本の道 私が歩いた道

大きな石が その道を

ふさいだ時、いっしょうけんめい

のぞいてくれた

暖い先生の力

一本の道 私の歩いた道

別れ道にきた時

そっとささやいてくれた

暖い両親の声

夏みかん

一年 大畑 治

大きくてこぼこの夏みかんに
 ナイフを入れるとつゆが飛び散った
 皮をむいていくうちに
 口の中にすっぱいつばがたまってきた
 袋をやぶき口に入れると
 じんとしびれてくるようだった
 のみこんでしまうと
 すっきりした気持ちになった

夜中に

一年 永井和子

夜中に私はふと目がさめた

戸がガタガタと

木がヒヒヒヒとこつちの方を見て

わらっているように見えた

お化けのような顔だけが私のまわりを

うろついている

「こわい！」

とおもわずさけびそうになった

胸がドキドキしている

ふとんをかぶつてねた
ああこわかった
こんな想像をしなければよかった
後悔した

遊覧船に乗って

二年 木村 早百合

朝も早く
静かな海上にダツダツダツと
快音が響く
それは齒切れよく
リズムカルに続く
私は船の一番先に腰かけていた
空はつきることなく澄み
海も限りなく青かった
まわりはすべて
明るいコバルトの世界だ
その果ての水平線上に
延々と連なる山々が
すばらしい深緑の大きを
はきだしていた
私は美しいものを初めて見るもののように
心をふるわせて見入った
沖の方で日にあたって光る無数の

きらめきや潮風が
いっそうあざやかにそれらを印象つけた
私には、この自然美の中にいるのが
私ひとりのように思われた
それどころか私自身
この自然の中の
一部になったようにさえ思われた
海の色は

ますます深さを増した
やがて銀白のカモメが
青空の中に羽ばたくのが見られる
向こう岸へはもうま近だ
私はもう一度
美しく、新鮮だった
朝の海をふりかえった

聖 火

二年 東 征 司

聖火がとおる
オレンジ色のトーチを持って
みんな旗をふる
走者は緊張する
みんなの目はトーチに集中する
二秒、三秒——

そして数秒

聖火のおつたあとの道路には

なにもない

緊張がほぐれる

あとにはガヤガヤ話しごえがのこる

聖火リレー歓迎の日に

二年 小形律子

「来たゾー」という声に

「えっ、どれ？」と私はいった

「エヘヘ……」と笑い声

「ウソ？いやネ」

一時三十分をいくらか過ぎて

「もう来てもいい頃なのに」と誰かがいった

「ほんとうねエ」と私は答えた

沿道に立ち並ぶ私たち、幼稚園の園児 近くの大人の人たち

道の真ん中には次の走者が整列している

沿道の人がきはいつか道の真ん中まではみだして

私の目は前しか見えない

また 「来たゾー」という声

「ウソ？」という声

「ほら、見てみる」

「あっ、ほんとだ」

ずっと横の人混みの間からながれる白い煙

聖火だ、聖火が来たんだ

胸がジーンとするような一瞬——オレンジ色の炎はゆらぎ、

あっという間にもう目の前を走り過ぎてしまっていた

駒が岳登山

二年 今泉博子

前方にくっきりそびえる駒が岳

うすむらさきの山を

火山灰の道が走る

細い道、急な道を汗だくになって登る

眼下に小さなトタン屋根が

まぶしく光っている 青い空に

カンカン照りつける太陽がにくらしい

「まだか」

足が動かなくなってくる

大きな岩に腰をかけて休む

大沼、小沼が

ずつと遠くの林の中から 顔を

のぞかせている

「やがて、頂上だ」

風がそよそよとほほをなでると

今までの疲れもいっぺんにふき飛んでしまった

苦しかった、でも

楽しかった 駒が岳登山

雨

一年 田原久美子

ザーツ ザーツ雨が降る。

「やだなあ！」

ふと、なにげなく出て来た一言
きつと心の中がじめじめして
暗い気持になるからだろう。

でも 雨の降ったあとは

ごみごみした空気が

きれいな、すみきつた空気になり

青空が見えてくる

そして、のどかな時になるのだ

「あつ、雨がやんだ！」

短歌



雑詠 (1)

二年 古仲淑子

ふと見ればいつか植えたる豆の葉の青々としてすまし立ちたり

二年 広川 豊

灰色の雲また白く陽はさして六月の風のあたたかきかな

二年 藤田州司

六月の夜道を行けば向こうから暗やみついて汽車走り来る

二年 畑 久夫

あと二キロ 汗にじませるワイシャツに緑はさえる六月の山

二年 住山省吾

グラウンドで体操している白い服 初夏の隅浴びてまぶしく光りぬ

短歌

○ 深夜なる雷の音恐ろしく

布団にもぐる我が小猫かな

○ 川岸で夢中にトンボ追いかける

子供の姿のおもしろさ

三年 福島典子

雜詠 (2)

夏と秋の歌ノートから

二年 太田 かおる

二年 宇野 正英

秋の空青く澄みきり白雲にまぼゆいほどの光りさしこむ

二年 笹島 文平

鉄棒でねこ飛びすれば風景はさかさになりて美しきかな
夏の陽は雲の間をつきぬけて今日もまた照らす体操場を

秋風になびく雑草ふみわけてわれ登りゆくきじひきの山

二年 高木 正子

教室は静かになりて先生の声ひとしきり高まりにけり
夕ぐれや かもめ飛びけり船の上 海の青さとたわむれるごとく

つけものをつける母の手あれはてて大根洗う水しみるかな

北風にさからいっさんにかけてくる 弟のははは燃えるごとく

二年 福沢 公子

秋空に高くそびえる胸ガ岳——登るはつづく軽石の道
空に高くきりたっている剣ガ峰 それにも負けずのぼる煙よ
秋晴れの空見上げれば赤とんぼ 雲母の羽を光らせるなり

だれもない夕ぐれせまる校庭に音も静かに雪降りつづく



作文



植物採集

三年 小松 美恵子

「準備OK 出発！」私たち兄弟三人は、サ
イクリングをかねた植物採集に赤川通りの方
へ行つた。澄みきつた青空のもとにベタルも
軽く出かけた。背中の方では父母の音がぼん
やり聞こえた。あいかわらず心配が絶えな
い。妹と弟ははりきつてもう橋の方へ行つて
しまった。私はベタルを速めた。石ころの道
で走りづらかったが橋をこえればコンクリー
トの白い道が続いている。氷の上をすべるよ
うな感じがした。ガードあたりに坂があつた
下りのはんどうで上る時は案外楽だった。両
側に畑がたたみのように並んでいる。
遠くの方には山が崇高な美しさをみせてい
る、山も畑も清らかで純粋な感じがする。
私はこういさわやかな感じが好きだ。「変

わつたのある？」と弟の声。私はびっくりし
て自転車をとめた。緑につつまれた道路のわ
きに黄色の小さな花をつけた草がひとときわめ
だった。

私も作業にかかった。シャベルでその草の
回りを掘つた。掘るにつれ、ミミズやアリが
あらわれてきた。殺すのはかわいそうだが勉
強のためだ。こめんなさい。根を少しづつ静か
にとつた。しおれるので土を少しつけておい
た。私たちはまた自転車にのって先に急い
だ。私は今までみたことのない茎の長い草を
みつけた。弟が掘りたいというので、弟を信
用して掘らせたが、その根は途中でシャベル
で切られて、あとがついてだめになってしま
つた。今度は妹がやつた。でもよほど長いと
みえて又だめだ。あきらめようかと思つた
が、何事三べんというから、私は慎重に慎重
に落ちついてやつた。

五分位もねばつた。それでも少しきずつい
ていたが、捨てるのは、なんとなくおしいよ
うな気がして、かごに入れた。この草一つで
もあとでみたら思い出深いと思う。私たちは
赤川へまっすすくいかないで途中から石ころの
多い道へとそれた。

妹が疲れたから少し休もうといったので、

私たちは自転車をとめて草原に休んだ。弟は
私の帽子でとんぼをとりはじめた。そしたら
妹が「かわいそうだからやめなさいとか」い
つて二人でさわいでいる。私はかごの中の草
を見た。弟の分も合わせて二十種類ある。
他の人に比べれば少ないかもしれないが私た
ちにとっては大きな収穫だ。かごの中の草
一つ一つにはそれぞれの思い出がある。私の
頭の中には標本がぼんやりとうかんでいた。

うちのねこ

一年 吉田 由美

「ただいまあ。」と言って玄かんの戸をあ
けると「ニャオー」とへんじをして出てくる
のはミツコだ。まるで母のかわりに「おかえ
り」と言っているような鳴き声。私がへやに
はいるとあとからそろそろついてくる。私の
足ぐびに、光った毛なみをひねるようにして
体をこする。毛をなでてやるとうれしそう
にのどをゴロゴロ鳴らす。母が買い物から帰
って来るとミツコは台所へすつとんで行く。
ミツコのごはんはみんなが食べ終わってか
らやる。かわいそうなので、みんなが食べて
いる時にやろうとすると「ゆみ子、そんな所

文

でやるんでない。」と母に叱られる、でもミツコの目を見ているといかにも腹がすいているようなので、つかくかれてやる。夕飯がすんで少したってから私は勉強する、勉強がすんでからも時々ねるのをまっついていられる時もある。

作

私の小さい頃、よくねこや犬をかっていたのだそうだが、みんな病気で死んだり悪いものを食べて死んだものが多い。それに私が小さい頃なのであまり知らない。だから今かっているミツコがいちばん私にはうれしい。だがミツコにも一つだけ欠点がある、ミツコのしっぽの先が直角に曲がっていることである。それにミツコはめすなので赤ちゃんを生むと赤ちゃんのしっぽの先までがみんな曲がっているのである。でも私はすきだ、あの直角にまがったしっぽが。ミツコはいつも金魚の水を飲んでいゝる。

テレビで見たことがあるが、ねこがミルクを飲むときの動き方などは実に変わっている。それからねこの足をつかんでさかさかさに落してもねこはくるっと回転してぎったように足が先に地面につく。どうしてねこはあのようなことができるのか、私にはわからない。ところでミツコが一番初めに家にきた時

はみんなも、びつくりしたが、それからの毎日というもの、ミツコはふとんにおしっこをしたり、弟たちはなぜけつたりたいたいたり、もうめっちゃくちゃだ。

いつか母は「このねこはおしっこたればばかりいて、もうなげなければだめだ。」とまて言ったことがある。でも今はもう家での生活にもなれ、おしっこはどこにしたらよいかということも自分でもわかっているようだ、家の中や外で生き物がかつていゝると家の中も明かるくなつてくる。このようなためにも、うちのねことしてミツコにずっといてももらいたいと思う。それに私にとつても一つの楽しみといゝえる。

飛行機にのつて

一年 高井 加寿子

八月十六日。

「きょうの天候は曇時々わか雨。」
ラジオの天気予報が流れてくる。

きょう、わたしは飛行機に乗りに行くのだ。七月の末に「北乳の製品で遊覧飛行に招待」という見出しのビラが新聞に入ってきた。わたしと弟はアイスクリームのフタを送

った、弟は当たらなかつたが、わたしは当たった。

先日、郵便で招待券が来た。

わたしは母に送つてもらつて、樺二に行き、樺二から観光バスで飛行場に向かった。途中、アイスクリームとパンフレットがくばられた。バスは海岸を通つていく。石川啄木の像が見られた。

飛行場についた。ちょうど第一便が着陸した所だった。わたしは上に登つて飛行機をそろうじする所を見たい。すると、「秋田行○○○○の乗航券をお持ちの方は入口まで来てください。」と、アナウンスが流れた。お客さんがぞろぞろと乗つて行く。大きな荷物を車で運んで乗せている。階段を放した。プロペラが回った。飛行機が滑走路をすべるように走つていった。「あ、とび上つた」また、飛行機が飛んで来た。「きつと、着陸するな」と、となりで見ていた男の人が言った。そのとおりで着陸した。もう一機、低く飛んで来た。この飛行機もまた、滑走路をすべり着陸した。

「遊覧飛行する人は入口に来てください」アナウンスが流れた。私はいそいでおりた。つきそいの人が人数を調べた。招待券と

文 作

ひきかえに「北日本航空」と、書いた丸い紙をわたした。飛行機に階段がつけられた。階段の所にいた人にこれを見せてわたしは乗った。

窓側の席にわたしはすわった。イスはホワホワで横にベルトがついていた。四角い窓から外がはつきり見える。ゆかは白いビニールがひいてあつた。「ベルトをおしめ下さい」「禁煙」前の方に書いてあつた字が光つた。スチュワーデスが「ベルトをおしめください」と、言つて見て回つた。プロペラが回つた。滑走路を走つた。止まつた。ブルブルブル……プロペラが勢よく回つた。「離陸準備終わり、これより離陸します」飛行機がぐんと上つた、足が浮き上つた感じがした。だんだん建物小さくなつていく、「函館を上空からごゆっくりご覧ください」スチュワーデスの声が流れた。

住宅の屋根がともきれいだ。「あ、五稜郭公園だ。わたしの家はあれだな。学校はあそこだな」すこし遅くてよくわからない。飛行機がすうーと下にさがつた。ちよと気が遠くなるような気がした。「あれはビルディングだなー」「とてもきれいな道がつづいている。」「ガタ、「ああ」飛行機が大きくゆれ

た、「ああ、びっくりした」「函館山だあ、かげに小さな山がある。」「海がともきれいだ。青々していて広々して……」

連絡船が走つていた。ぐるつと回つた。こんどはドックが見えてきた。函館港も有川さんばしも見えた。畑や田がきれいにならんで美しい。また、ちよつと気が遠くなつた、五稜郭がまた見えた。こんどははつきり見えた。もう一度上空を回つて飛行機は着陸した。「きょうはすこしきりがあり、ゆれましたがおけがはありませんでしたか。」と、スチュワーデスの声が流れた、階段がつけられわたしたちはおりた。飛行場の前にバスが待つていた。わたし達はそれに乗つて帰つた。「初めはおつかかなかつたけれどすぐなれて、とてもおもしろかつた」と、家に帰つて父母に教えると、弟は「来年は、ぼくが乗るんだ」と、今からはりきつている。

わたしも協力して、北乳の券を集めてあげよう。(昭和三九年八月一八日)

子 犬

一 年 釣 谷 妙 子

夕飯をすませて犬小屋へ行つてみると、モ

コちゃんが横になつたまま何かをペロペロなめていた。犬小屋をちよつとのぞいてみると、子犬がたくさん生まれてきた。数えてみようと思つても中がごちゃごちゃなので数えられなかつた。だいたいの予想で六匹くらいだろうと思ひながら家へもどつた。

次の朝、おきてすぐ小屋へ行つて数えてみたら九匹もいた。私はびっくりして姉たちにすぐ知らせた。

姉たちは、「ええつ、九匹も生まれたの。」「と、びっくりしたような目つきで、すぐ、犬小屋へとんでいった。

時計を見ると、学校へ行かなければならぬ時間だ。

今はこれまでにして、学校から帰つて来たからゆっくり見ようと思つて、すぐ学校へ行く準備をした。

学校から帰つてくるともう一度見なおした。でも数はやつぱり変わらない。「こんなにごちゃごちゃいたら全部飼えないだろうな。やつぱりすててしまふのだらうか。」「私はこう思ひながら子犬の顔をじつと見た。なんだかブルドッグの赤ちゃんのような顔つきをしていた。

私は、つみもない子犬を保健所へやつて殺

文

してしまふなんてざんこくだなと思つた。でもしかたがない。さつしゆなんて日本中にあるにすぎないと思つたからだ。

私は、子犬の動きをじつと見ていた。子犬が多すぎるので、あずましく乳を飲めないと思つた。それで牛乳を買つて来て、子犬に飲ませようとして牛乳をあたたためてさとうを入れ

てやつた。そして、一匹取り出すと、モコちゃんがおこつてとびついて来た。私はびつくりしてすぐ子犬を小屋へもどした。牛乳はモコちゃんに飲ませることにした。

モコちゃんの毛の色はこげ茶に近い色なので子犬もそれに似てこげ茶に近い色のものもいるし、白とこげ茶のまだらの子犬もいる。

よく日、学校から帰つて来ると子犬が三匹しかいなかった。すぐ母に聞いてみると、「朝、知子ねえさんが持つていったよ。」と言つた。私は、「まだ生まれてから三日しかたつていないのに、どうせなげるのならもう少し大きくしてからなげるとよかつたのに。」と母に言うと、「あまり多すぎるからね。」と着物を縫いながら言つた。

夕方の五時頃になると姉たちが会社から帰つて来る。私は「子犬、元気だった。」と聞くと、姉は「半分死にかけたよ。」と小さ

な声で言つた。私はそれを聞くと、たまらなく子犬がかわいそうになつた。でも、どうしようもない。

今、どうしているのだろうか、もう、死んだらうか。

私は、とこについてからも子犬のことで、頭がいっぱいだった。

後輩へ

三年 工藤修 二

後輩よ、時を使いなさい。時を過ぎしなさい。時に使われてはならない、時を過ぎて行かせてはいけない。時をつかまえないければならない。時は遅くも速くもならない。

だが努力によつて、あなたより努力しない者より時を多く使える。いい変えれば、努力によつてより有効に時を作ることが出来る。

精一ぱい努力する。何年かたち、その時を振り返つてみる。とそこになにか充実しきつた満ち足りた満足感を見いだすだろう、ただいたずらに時を過ごす、何も自分のしようと思ふ事も持たず、日々が過ぎて行く。

やがて、みじめな敗北にたたくつけられ、過去を思う。そこには何もなかった。ただ、

永久に、絶対、取りもどす事のできない空白、無駄な時があるのみ。そして、時を無駄にした事を悔いやつと時の重要さが少しわかつてくる。だが、まだ無駄に過ぎている事に気づく。そして「明日がある」と弁解する。

誰でもこういう課程を数回は経験し、又、経験するだろう。人間は常に時を最大限にばかり使っていると、疲れてしまう。

だから、適当に休み、次の進歩への原動力の一部とする。休み時も次の進歩へのきつかけを失わないようにしなければならぬ。ところが現在の我が校には、時の重要さをわきまえていないおろかな者があまりにも多くはないが、休み過ぎて進歩を忘れた者が多すぎやしないか。後輩よ、あなた方一人一人が、時の重要さに目覚めねばならない。進歩を忘れた者よ、あなたは、過去に「よし、やるぞ、」という氣を起こしたことでしよう。その時を思い出しなさい。忘れてはいけない。その人間が、発展を目ざし、新鮮な希望に満ちあふれた、その時の氣持を永遠に忘れてはいけない。

それは進歩への一ぱん大切な原動力となるものなのだ。現在はすぐあつという間に過去になつてしまふ。過去は、もう来ないのだ。

作

行ってしまった時なのだ。

現在と未来に生きなさい。そして、自分の、過去から、現在までの、おろかな姿に目覚め、進歩への決意を新たにした時の気持ちをお忘れないように。

「一飛び」を読んで

一年 松 森 睦 子

この物語はロシアの有名な文豪トルストイの作品である。トルストイというと、私達がすぐに思い出すのは、やはり、彼の代表作「戦争と平和」「復活」ではないだろうか。ナポレオンのロシア侵入を中心に十九世紀初頭のロシア社会の全容を描いた「戦争と平和」、彼の思想、芸術、宗教観のすべてを総括しているといえる「復活」にしても、求道的精神がその文章一句一句にあらわれていると思ふ。

この物語も、少年の父船長が主人公で、父親の愛情が最も感動的で、作者があらわそうとしたとはいえず、少年は帽子なしにされて笑ったものか、腹をたてたものか自分でもわからなかった。」というところは、少年が人間としての正しい道を求めようとしたとい

うとオーバーかも知れないが、人間としてのとるべき態度を求めようとしたことは確かである。

ところで、もしだれかにこの少年をどういう人だと思ふかと聞かれたら、私はこう答える。彼はたいへん負けずぎらいな少年だ。

私がこの物語を初めて読んだのは、やはり、教科書上でだが、四年生の時である。その時強く感じたのは父親の愛情などという美しいものではなく、この少年は私と似ているな

と思つたのである。なぜかという、私もそうとうの負けずぎらいだ。試験の点数が友達より悪いくやしくて、今度こそはあの人よりも……と思ふ。私と似ているからではないが、こういうタイプは好む。

しかし、この少年の場合、負けずぎらいが度をこしてかえって人々の心に恐怖を起こさせ、小さなことをどうしようもできなく発展させてしまった。人の性格は、その人の用い

方によつて良くも悪くもなるんだなあとつくづく思ふ。

さて、私がここでもう一度「一飛び」を学び感動したことはやはり、父親の愛情というものであつた。また、前は主人公は少年だと思つていたが、今は父親だと思ふ。それだけ私

の考えが変つたことは、少しでも文学に対して知識が増したことかとうれしく思ふ。

戦地で、若き兵隊がきずついた時、「お母さん！」と叫んで死んで行く者は多いが、「お父さん！」と言う者ははいないといつてもよいという。それほど、私達はふだん父親の愛情をわすれがちである。しかし、作者トルストイは私達の心につかりと父親の愛情の姿をきざんでくれたのである。

父親！
小さかつた時、買い物に行つた帰り、車が来たのも知らず、飛びだそうとした私をさつとだきあげた父

小学校の時、悪い点数をとつて来た私に、真剣に教えてくれた父

一人病気でさびしかつた時、ひまを見ては好きな本や食べ物を持って笑つていた私の父

このころは、鏡の前でしきりにうすくなつた頭の手入れをしている父

ああ、お父さん！
私は今まであなたの愛情をわすれかけていた

この雨の夜も、私のために働いている父を

作

文

文

私はこの物語で、父の愛情を強く思わされた。私はこの「一飛びが教科書上で二度も学ぶ機会をあたえられたことをうれしく思い、また私も、トルストイのように人々にわすれられてゐる重要なことを文で知らせることができたなら幸わせである。

作

母

二年 塩田敬子

家の中はしんとしている。とても静かだ。蛍光灯の下で母がテーブルに向かつて一心に書き物をしている、真剣な顔をして食物の栄養のことなどをいろいろな本を調べながら、さらさらとペンを動かしている。頭のところどころに白髪が、ちらほら見える、ひっこんだ目、赤みがなく肉づきの悪いはお。その顔には私たちをここまで育て上げた苦労が、しみこんでいる、母の仕事は「国の子寮」という両親のない子がいる所の保母さんだ。

朝九時から夜八時まで、小さな体全体で動きまわって子供の世話や料理を作ったり、本当に疲れる仕事だろうと思う。とくに、料理は、栄養価や経済のことを考えて献立てしてなくてはならないので、とても頭を使う。小さ

な体と頭を更って一日中動き回るのだから、まったく並たいいの仕事ではないだろう。でも私たちは母が夜疲れて帰ってくるのを知っているが、つい、めんどろになつて台所を片づけておかなかつたりして、叱られてはふくれたりすることもめずらしくない。

私が一番困るのはテストの成績を見せる時だ。私は初めから「悪いからね。」と、ことわつてから見せるが、母はじいっとテストを見て「こんなに簡単なところをまちがつて」とか、いろいろ言います。私は「あーあ、また始まつた」と思つて、何か聞かれても黙つてゐると「本当にあんたの頭はガンコなんだから、そういうことだからいくらやつても伸びないでしょう。」と、おこりながら印を押す。私は「かあさんは私のことを思つてゐるからこそ文句を言うのだ。」と、わかつてゐるのに、いざ文句を言われると頭にきて口もききたくなくなつてしまふ。悪いくせだと思つてゐるけれども、なかなか直らない。また、私は、母とは反対に何をやつても、おそくてへたなのでいつも注意されている。

でも、母はいつもことばかり言つてゐるわけではない。私たちが勉強のわからない時は一諸に考えてくれる。それに、とても手が

器用で、ひまな時にはエプロンや洋服をつつくてくれたりする。私は母のつくつたものならどこへ着ていってもはずかしくないと思つている。

母が仕事を始めてから今年で六年目。一番最初は保険の外交員、次はミシン会社のセールス、そして今の仕事に移つたのだが、毎日疲れて帰ってくる母の顔を見ると、私も早く学校を卒業して、母に楽をさせてあげたいとしみじみ思う。それにしても、母はいつ楽しみがあるのだろうか。朝八時から夜の九時まで仕事。帰つてからも、料理のことについて調べものをしなくてはならない。きつと母の一番楽しみというのは、食べることや遊ぶことではなく、私たちが立派に育つことだと思ふ。

だから、私も母に心配をかけないように、しっかり勉強しなければならぬと思う。

私の世界一大好きな立派なかあさん、もつと肥つて、これからも元気で働いてくれることを願っています。

△母の日の感想文入選作▽

「シートン動物記」から

— 銀狐物語 —

二年 日下部 早苗

私は今まであまり理科関係のものは読むのが好きでなかった。なぜかというところと文学関係に比べ、特に訴えるものがなく、聞いただけでもかたぐるしい感じがしたからだ。

しかし、それはこの「シートン動物記」を読む前のことであつた。この本の中の「銀狐物語」からは小説類とまた違った、異色の何かを得られたと思う。「銀狐物語」は銀狐ドミノの生い立ちと、ドミノと少女の反情の物語である。狐族もやはり人間と同じ家庭生活を営んでいる。そのある家庭の中の次男としてドミノは生まれた。

ドミノの家族は、つまり狐族の家庭は人間と少し違っていた。人間は、父が家庭の中心人物だが、ドミノたちは母が家庭の中心人物なのだ。だから権力は母にあるのだ。しかし母に権力があるだけに、人間には見られない、母がげだものと戦いをしなければならぬのだ。人間なら、むだな戦いは話し合ひによつて解決されるのに、狐には「力は正義な

り、立ち去れ、しからずんば戦え」の規則があるばかりだ。そのような間にドミノはたくましく成長していた、そしてスノーイラツフと共同生活をするようになったが、そのうち子供ができるようになって、ドミノはしばらく巢にいれなくなった。

狐の間の騎士道精神の一部分だ。また、食物は鹿などを殺さなければならぬ。そうしないと自分たちが殺されるのだから。

ドミノはこの面でも英知を発揮して家族を守り続けた。たとえば野原で鹿に追いかけて倒すとす。するとすぐさま森に入り鹿を迷わし、その間に後方に回り、逆に相手を倒すのだ。また、人間がしかけた罠もすぐに見破る。「人間は知能で融通がきくが、動物は本能だけなので融通はきかない」と、教科書にこんな一節があつたが、ドミノの本能はどのくらいで、ほんとうに本能だけでこのようなことをしているのかと、思わないでいられないような気がした。

昔、人間にお守りというのがあつたそうだが、このドミノにもこれに似たようなものがあつた。それは河と夜だつた。幼いころの遊び場所、大人になってからの食物需要所、また危険なときにここに来ると河は守ってくれ

るのだ。そして夜は彼らの屋にあたる。狐は夜にえさをさがす、だから夜は自分の世界だつた。そうしてもう一つ彼を守つてくれたのは、ある農家の少女だつた。名前は知らない。まだドミノが子供だつたときちよいちよい、いっしょに遊んだ少女だつた。

いつだつたか猟師の犬どもに追われ、もう死ぬすぐそこまできたとき、ここへきたおかげで少し休めた。が、この子の父に追い出されて、河へ行く。そして氷塊の上にいさぎよく飛び乗った。ばかな犬の親分のヘクラまで飛び乗ったのだが、しかしドミノは最後まで力を落とさず、渦を巻いている滝の一步手前で向こう岸へ飛び移つた。残されたヘクラはそのまま滝へ落ちてしまつた。ドミノは試験をこえて勝利を得た。ドミノがいくらか知恵があるからといつても、このような試験をのりこえたのは彼にとつて大きな教訓となつたろう。自慢の尻尾もその時はたれ下がつていた。

作者シートンは「狐の世界における生活が、人間の世界に伝へること」が目的だそうだが、これとは別なものが私たちに伝へてきたのではないだろうか。

狐族のモノガミ制生活と人間のモノガミ制生活との間には敵を近づけない、また、

文

その日の食物をどうするかなどの難問が狐にはある。本能と知能のこともまだはつきりしていない。

作

ドミノとスノーイラップはまだニューイングラランドのどこかに生きているだろう。そして人間生活を見ている。もしドミノたちが人間で私が狐だったら、狐のまだ人間に知れていないことがわかるだろう。でもやはり今のままでよいのだ。たいいていの動物にはドミノのような生活がある。狐が解禁になると、いたるところでハンターたちが腕を競いあうが、ドミノたちの事を考えると、むだな競争はやめるようにと願いたい。

『シートン作「シートン動物記」

評論社

火災防止に思う

二年 烟 久 夫

最近の新聞は、暗いニュースが紙面を占領しています。たとえば、毎日の交通事故はいつものことながら、大雨の被害、震災、強盗、殺人等々。それらに混じって、火災のニュースもまた見落とすことができません。冬に多いはずの火災が、近ごろでは春先になっていっそうふえてきています。いくら函館の

消防設備がよいといっても、私たちの心がけがたいせつだとつくづく思いました。

それは、去る四月の中頃、ぼくの家の近くの印刷店が焼けました。何でも話に聞くと、印刷に使う油に引火したそうで、店の人が気がつくのがおそかったために、手がつけられなかったそうです。それに、なにしろ油ですから、水でそう簡単に消えるわけがありません。消防車がすぐ来て火は消えましたが、ものすごい炎で、その惨事がぼくの家の玄関からはつきり見えました。焼けあとに残ったのは、黒こげになった柱と、持ち出した家財道具と、中央には真黒い印刷機だけでした。現在は前よりデラックスで、りっぱな印刷店になっていますが——。

火事が大きくなかったからよかったものの、このことから、ぼくは考えました。

科学技術産業の発達した今日、どこの家庭でも石油コンロに使う油とか、揮発油とか、目に見えない所、ふだん気のつかない所でも石油、あるいはガソリンなどの油類がすいぶん多く使われてきています。

昔は——少なくとも、まだ科学がこんなに進歩しなかった頃は、火事という水をかければ消える、それが当然の常識でしたが、現

在のように科学が発達し、家庭でも多く油類などを使っていることを考えると、もしそれにでも引火したら、ちょっとやそつとでは消えないことになるでしょうし、水では防ぎきることができません。それがもとで、大火を引き起こし、莫大な損害をこうむらないともかぎりません。ですから、ぼくは家庭にも小さな消火器が一つくらいずつあってもいいのではないかと考えたのです。

昔から「備えあれば憂いなし」とかいいますが、全くそのとおりだと思えます。ちょっとした不注意から仮に油に火がついたとしても、あわてずに備えつけの消火器を持ち出して消火することかできたなら、大きな火事にならないですむはずで、科学時代ということばで代表されるのが現在のぼくたちの生活なら、その安全をはかることが第一です。そしてそのような家庭生活になくってはならない物の一つとして、火災防止に家庭用消火器をぜひ備えつけておきたいのです。

ひとつの家庭に一本の消火器の備えつけと火に対するひとりひとりの細かな心づかいがあつて、それが全家庭に広まっていってこそ火災はほんとうに防止できるものだとはぼくは考えます。

『安全に関する作文道審査佳作入選作』

言 葉

三年 今 井 幹 子

私は近ごろことばについて考えました。

人間はお互いに心を通じ合うために、ことばを用いて、お互いに知らせたり、教えられたりします。そのために、お互いの知恵やいろいろなことばがだんだんと積み上げられて現代のような人類文化を築きあげることが出きたのです。ある社会の時間に「中国はなぜ文化が遅れたか」「それは、ことばのせいだ」と、ある先生がおっしゃった。中国の場合、皆がおぼえやすい漢字を用いていたことが一番文化を後退させていたのだと思えます。そのころの日本も漢字を用いていたが、日本人は、覚えやすいカナを發明した。そのために社会の発達や文化が早く開けました。私たちが社会生活を営み、文化を進めるために、ことばがどれほど重要な役割をはたしているか、反省してみればみるほどはかりしれないものがあると思えました。

その国のことばを考えれば考えるほど、社会の発達と文化の進み方がわかります。

日本では、つい最近まで、話しことばと書きことばがちがっていて、話しことばは文化

発達からおくれていたように思います。

しかし、社会の時間に学んだように、半世紀ころから、言文一致運動がおこりました。

二葉亭四迷が「浮雲」という小説を話しことばで書き、このころから、近代日本文学の新しい方向が定められ、それからの文学者の多くは言文一致の文章を用いるようになり、明治の終りごろから、新聞雑誌の文章はたいがい言文一致の口語体を採用するようになったことは大きな進歩といえるでしょう。

このようなことばを使つての生活の改善はいろいろな機会に行なわれるようになりました。たとえば、学校などでの、ホームルーム、会議、その他いろいろな会などの話し合いを効果的なものとするためには、討議のしかたなどを身につけることが大切です。

又、文を書く時は、現在のような口語文をもつともつと發展させるために、話しことばをよく理解し、自分たちの伝統を意識して自覚を起し、ことばの発達を文章などにいかすようにしてはなりません。

このような大切な問題を解決することによつて、私たちの社会生活が健全に民主化され、たくましく發揮することができるようになるでしょう。

中学三年間の

学習の反省

三年 川 浪 多万恵

後、数十日で中学生としての生活も終わりを告げようとする事になり、いろいろ反省することの多い現在です。この三年間を顧みると、楽しかったこと、苦しかったこと、ほんとうにいろいろなことがありました。

三十七年四月、新しい校舎に、新しい校章を胸に光らせて新しい紺のスカートをはいて入学。そして私の心も新しい希望、夢であふれていました。楽しくのんびりしていた一年。二年の生活はあっという間に過ぎてしまい、三年になってからは、テスト続きです。机に向かつて、又夜布団の中でふつと考えることは、やはり「一・二年の時に真剣にやっておけばよかった。」ということばかりです。一・二年の時はまったくのんきそのものでした。最初のうちは学習雑誌を横に置いて綿密に計画を立て、それを実行するということを何回となく試みました。

しかし、必ず失敗に終わってしまうのでした。「計画を立てると、必ず失敗」それが常

文

でした。計画をどうしても守れなかったその最大の原因はテレビでした。家が狭いせいもありましたが、勉強する場合には、例外なくテレビが前にどっかりと腰をすえているのです。教科書を見る時間より、テレビを見ているほうが多いくらいでした。こんな勉強で、実力がつくはずがありませんでした。おかげで、一年に習ったことは大部分忘れてしまっています。

三年になると「受験」といういやな文字が新聞・雑誌などで目につくようになりました。しかし、そんなことも私になんの効果もありませんでした。でも、いかに楽天家の私でも、夏休みになると緊張してききました。一日一日、卒業が近づくにつれて、いらいらするばかりです。十一月になってから再び立てた計画は、現在はどうやら順調に進行中です。三年間の数多い計画の中で唯一の成功作品なのです。

こうしてみると、失敗ばかりの三年間でしたが、たつた一つ満足していることがあります。それは読書を充分にしたことです。いわゆる「名作」といわれているものではありませんが、私は、それらの本によって得たことは、学校で教わることよりもはるかに大切で

人間として必要なことであると思っ
ていま
す。今も勉強がいやになったり、人生に疑問を抱いたりした時には、良き友「本」によって悩みを解消しています。

一・二年の皆さんも、これから勉強、その他いろいろな面で悩みが起きてくると思っ
ます。そんな時には、私が読書で得たものを何
かから見つけ出して下さい。そして五稜中学
校の生徒として誇りを持って、悔いのない楽
しい中学校生活を送って下さい。

最後に、私の今までの短い読書歴の中で、一番感動し、一番多くのことを与えてくれた「赤毛のアン」の中から、一つの文を借りて結びとします。

真剣な仕事と、立派な抱負と、あつい友情はアンのものであった。何者もアンが生まれつき持っている空想と、夢の国を奪うことはできないのだった。そして、道には常に曲り道があるのだ。

「神は天にあり、世は全てよし」とアンはそつとつぶやいた。

自転車旅行

三年 渡辺 敏明

夏休みのある暑い午後、家で体をもてあましたわれわれ二人は、自転車で散歩しようということになった。

「どこに行く。」「国道を飛ばすか。」と話がまとまり、亀田役場の横を通って国道に出た。ちょうど一日で最も暑い時だった。太陽はギラギラ照りつけてきたが坂道を勢いよくふつ飛ばしたので暑さもふつ飛んだ。松の並木がどこまでも続く。思うそんなふん染しんでいると勉強の事や、おもしろくない事など頭から追い出されてやっぱり夏休みはいいなあと考えた。

楽しいと自然にスピードがでる。桔梗・大中山・七飯とあつというまにすぎて、気分爽快。そして峠下の前にくると下り坂、「飛ばせ。」「それ。」下りの連続、おもしろいようにスピードがつく。家も人も、ビュンビュン後へやって気分は最高、しかし上りにかかっ
てから杜快さも消えちまった。

汗はダラダラ流れる。自転車は思うように進まない。顔を真赤にして二人とも進んだ、燃えるような太陽を受けながら。こんなはずじ

文 作

やなかつた、とぼやいてもおそかつた。その時はもう大沼まで行くことに決めてしまつていたから。カメのようにノロノロ進んでいくうちに見覚えのある赤い鉄橋が見えてきた。「おい、道はまだか。」「もうすぐだ。」「ああ、もうだめだ。」「がんばれ。」とかなんとかいつているうちに、真黒い口をあけ、たずい道が見えた。

見えたとなると最後の力をふりしぼつてけんめいにたどりついた。飛びこんでみて、ヒヤリときた、中はまるで冷蔵庫のようだ。だいたい色のランプが美しい。長い、ずい道を出ると目の前に大沼が開けてきた。後は下りだ、そう思うと急にホツとした。しかし急に道が悪くなりタイヤはがたがた、スピードだけは出るので「バンクしねえといいなあ。」と思つていると案のじょうKのがやつた。「しまった。」「どうした、バンクか。」あたりは家も何もない山の中、自転車をおしながら「金あるのか。」「おまへは。」「O。」「おれは十円。」「ハハハ……。」「おもわず笑わさつた。大沼へ着いてもバンクの修理代にもならない。」「どうする。」「なんとかなるさ。」公園にはついてみたが金はなし。「しょうがない。自転車屋にわけをいって金

を借りよう。」となつて、ある自転車屋に入つた。なるべくいいねいなことばを使って「ごめんください。」しかし出てきたのはおばあさん。「今店の者がいないので修理はできない。」といわれたのでがっかり、「もう一けんのはうへ行つてみるか。」「まてよ、おれたちだけで直したらたじやねえのか。」「そうだ、もうかつた。」一度頼んでO・K、見よう見まねでなんとか修理はすませたが、なにしろ自信がない。おまけに金もない。「お金は。」といつたらおばあさんは「いいです。」「しめた。」「早いとこひきあげよう。」金もないので駅で水をたら腹のんで出発、しかしとうとうまたバンク、完全に頭にくた。「車をとめて乗つてもらえ。」「しよがねえな。」テレビで見た要領をやつてみたが一台のはだめ。「けつちくせえな。」そこへもう一台、今度はOK。この時ほど親切がピンときたことはなかつた。

その車はトヨタのサービスカーだった。サービスカーだからサービスしてくれたわけはないだらうけれど、車は一気に坂を下り、猛烈なスピードで飛ばしてくれた。行きはさつそうと出かけたのが、帰りはこんなさままでは「かっこうわるいなあ。」帰りは

は運転手さんに何度も礼をいって自転車をおして家についたときにはもう暑い太陽も沈みかけていた。

僕の発明工夫

三年 高橋悦郎

僕の入っている発明工夫クラブは、二十人たらずの男生徒ばかりのクラブで、その目的は生活の改良です。毎週一・二回理科室に集まつて、皆の案を話し合い、検討し合います。

夏休みの数日前のクラブ会で、坂牧先生から夏休みが終わつたらすぐ、全市発明工夫展があるから、「休み中に何か一つ作品を作つてごらん。」と、言われた。

ちようど、僕には前から思つていたものがあつたのでクラブ会でそれを発明した動機と、長所、短所を説明した。

それは、毎日母が夕飯の終わったあとの食器の消毒をコンロに湯をわかして、やっているので、なにか箱に入れるだけでできないものかなあと、考えたのだ。

文

作

始めに、いろいろな方面から考えて設計した。使いやすさ、経費などいろいろ検討し、実物の事を考えて、中に入れる紫外線電球のねだんなど、中村理科器具店にも電話で聞いてみた。それから、二分の一のものけいの製作にかかった。入れる茶わんの大きさ、数などから考えて、実物は、高さ六十センチメートル、直径三十七センチメートルという円柱形にし、中には網の棚三段と、真中に紫外線電球を通した。また物を入れるとき、棚を回しながら入れるため、入り口は小さくてすんだ。しかし、入り口の所が一番手間がかかって、一度は投げそうになった。というのは厚紙が厚過ぎてなかなか曲らないのだ。家中の知恵をしぼって、やつと、ボール紙の戸をつけることが出きた。しかしボール紙であまりていさいが良くないので、最後に色をぬることにした。

この殺菌燈付き回転食器棚は茶わんをふかなくても、殺菌燈の電熱でかわくので衛生的にも非常によい。しかし欠点が一つある。それは、中に入る殺菌燈の値段が非常に高く、一燈千円以上もすることだ。

これが函館市発明工夫展で入賞するとは、思ってもいませんでした。しかし入賞したら

いいなあとは考えました。夕刊に発表がのつていたけれど読み落とし、学校へ行って友達に言われて知ったけれども、しかし実感がわかず、今井デパートの展覧会会場へ行き、僕の作品に金紙がついていたので、初めて本当だと思いました。家の人たちも見に行きました。父は、「学生らしい作品だ。」とほめてくれました。そしてだんだんと気持ち明るくなりました。

家の中には今日でも、まだ昔からの生活がそのまま何の工夫なしに使っているものが非常にたくさんあるような気がします。それで僕はこれを機会に自分の家の生活をよく理解して、小さな事がらでも、少しでも工夫していきたいと思ひます。

夏休みのある日の

生活の中から

三年 金村 敏子

ボーン、ボーン、二時になった。たいくつである。だれも家にはいない。レコードだけが軽快になっている。たいくつだ、おもしろくない。母は旅行、兄はキャンプ、父はつりにいっている。私だけ勉強する気にならない。せ

つかくたてた計画もまだ半分もすすんでいない。

ニャーオ、愛称ミケ、我が家唯一の動物である。ミケはちよつと私に似て風変わりな所がある。それで私の遊び相手にはちよつどよいし、遊んでいと愉快になる。なんでも動くものを見つけると、まずフウーと鳴いて背を立てる、そしてねらいをつけて飛びかかる。それがただ飛びつくだけですぐにげて行く。そのにげていくときのそぶりがおもしろい。途中でちらつと様子をかがって飛びかかる。

でもこのミケのおかげでどうやらたいくつしのぎになった。毎日毎日ボンヤリすごしているうちにもう休みものこり少なくなつてしまった。

しかしこれから毎日の生活を有意義にすごしていきたい。ニャーゴーン

修学旅行の思し出

三年 前川 成子

「成子、スツケースを持ってごらん」と母の声。せまい家の中を、いったりきたり。「カバンが歩いてるみたい」だとか、これでは、

文 作

家中の修学旅行のようだ。

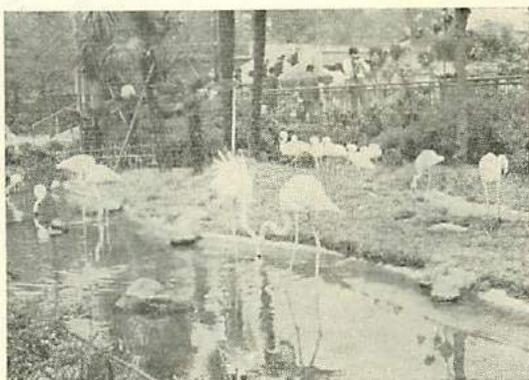
楽しみにしていた旅行だけに、私は、何を言われても笑いが止まらないくらいだった。風が出て来た。家中で心配するけれど、私は全然気にもならず、ただただうれしかった。

四月十七日、いよいよ出発。雨の中を、駅についた。みんな言葉がはずんで、とても楽しそうであった。

十二時二十分、いよいよ出発。函館港をあちにして、まちかねていた東京と進んだ。船の中、汽車の中、たくさんの思い出を残して、東京についた。朝、胸いっぱい大気を吸いながら、目のまわるような車の街に出てびっくりしてしまった。科学博物館、動物園いろいろ見学した。動物園では、写真を写したり、Tさんといっしょに動物を見に行ったりした。後菜園では、いろいろおもしろい乗り物がたくさんあった。

ほとんどの乗り物は目のまわるような物ばかりだったので、乗らないつもりだったが、みんなキヤアキヤアと声を出して乗っているのを見て、じっとしてられないで、Yさんといっしょに乗りに行った。目のまわらないもの目のまわらないものと選んではじめに乗ったのが、二重カンランである。

始めは、何もこわくなかったが、あとになると、いつまでたつてもつかないので、二人で「何回まわったら降りるんだらうね」出てくる言葉はそればかり。やっとの思いで、そこから降り、こんどは、よくテレビに写った



り写真ののったりしているティーカップである。四つばかり乗って、ベンチにすわって見ていると、みんな楽しそうに乗っている。そこを出て旅館についた。みんな、どんな部

屋だろうと言いついてた部屋は、大広間だった。

荷物を置き、そこにすわったらもう足が棒になって立てないほどだった。荷物を整理しているうちに、夕食がきた。みんな夕食を食べるのは、初めての晩だ。家で食べる時とくらべて、とても楽しく食べた。

寝る時間が来た。みんな床にはいったのはいいが、みんなベチャクチャ話しを始めた。「みんな、B組がうるさいよ」副議長さんは自分の組のことを言われたので、一生懸命注意した。それも聞かないで、まだ騒いでいる人がいた。そのうちに、みんな眠ってしまった。

翌日早く目がさめた。今日は、バスでいろいろ見学だ。バスの中では、歌をうたったり、クイズをやったりした。松坂屋では買物をした。松坂屋は大変広くまいごになりそうだった。

及川さん、設楽さん、山崎さん、私四人手をつないで買い物をした。屋上に乗るところには、山崎さんと二人きりになっていた。買物がすぎ、旅館についた。十九日は、私の楽しみに一つであるおしさんの家族に会う日だ。旅館の前には面会者がたくさんいた。来てい

ないかなあと思つて見渡したが、いかなかった
のでがっかりして部屋に入った。

みんなうれしそうに、外にとび出ていく。

まどから外を見ると「ああ、来た」と思わず
声が出た。

作

私は、今すぐでも窓からとび出して行きた
いほど、うれしかった。いざ会つてみたら、
恥ずかしくて何もいえなかった。

タクシーに乗つて町に出た。しばらくして
から食堂に入った。食堂はすぐくこんでい
た。

やつとの思いで場所をとつた。まわりを見
ると、クラスの人も来ていた。こんどは東京
で一番にぎやかな銀座につれていってもらつ
た。

話しながら歩いていると、「おじさんは、
先生と同級生なんだよ」と言つた時は、びっ
くりした。

いろいろデパートに入つておみやげを買つ
てもらつた。

二十日の日、今日は東京最後の見学だ。皇
居・羽田・横浜・東京タワー、数々の思い出
を残して、今さうろうとしている。

最後のバスの中はほんとうに、たのしかつ
た。先生の「玉将」、運転手さんの歌、今ま

でいろいろな観光バスに乗つたが、運転手さ
んが歌をうたつたのは初めてだ。みんなで最
後に、ほたるの光を合唱した。その時は自然
と涙が出て来た。男生徒も、この時はまじめ
に歌っていたようだ。

ガイドさん、運転手さんよ、さようなら。
数々の思い出を胸いっぱいに残して、今この
東京の夜の銀座から離れようとしている。四
泊五日の修学旅行、ほんとうにほんとうに葉
しかなかった。



俳句

三年 和田潤子

夕立や グラジオオラスは赤くさえ
夕立に あさがおの花泣いたよう
サルビアの かげに毛虫迷ぐ
にわか雨

短歌

ちようの来て静かに眠る午後三時
カンナの花は赤く燃え咲く
子どもらのゆかたにぎやかに花のよ
う 港祭りの夜はふけゆく
きのうより カエルの声がふえたよ
う 川辺の道を父とゆくととき

報 部

クラブの歩み

体育クラブ

バレー部

一九六四年にはいつて私たちバレーボール部員は本格的トレーニングに入りました。とはいっても男子部員は三年が一人、二年が三人というメンバーでしたのでまったく力がぬけそうになりました。

「一九六四年」それは偉大な年でありました。一九六四年十月十日、この日は第十八回オリンピック東京大会の開会式でした。そして十月二十三日「その日にオリンピックはある」と言った大松日本女子バレーボール監督は今ではまったく有名になりました。我が校の第一期バレーボール女子は優勝という栄えある栄冠をうけましたが、今年の中体連バレーボール大会では残念ながら敗れ去りました。

しかし、すこしでも多くの時間と人数をついやして練習しました。バレーの練習は、今年教生先生として本校へお出でくださった小西先生が手伝って下さいました。が、先生の練習はたいへんきびしいものがありました。テレビなどで日紡の選手が球にぶつかっているのをよく見ますが、私たちには、人が見るよりその練習のつらさがよくわかります。バレーボールの試合は、「穴できまる」といつてよいほどです。その穴とは選手が行動

できない所を意味します。また練習は、その穴をふさぐことにはじまり、ふさぐことに終わります。一部のすぎも許されない精神的、肉体的疲労はたいへんなものでした。わずかの人数でしたが、男子、女子ともによくがんばってくれました。

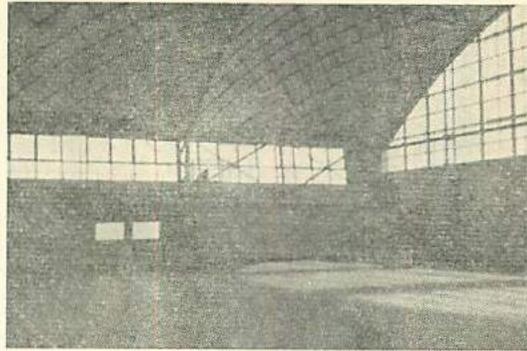
阿部先生、小西先生、その他の先生、先輩試合の時の陸上部のみなさん、そして応援下さったみなさんに深く感謝いたします。

二年・一年の部員のみなさんは大いにハッスルしてください。
(山本耕一郎)

体操部

本校体操部の第一頁には「優勝」という文字がでかかど書かれてある。我々もこれに続いて第二頁も優勝という字で飾ろうと、放課後、夏休み、一生懸命練習に励んだ。

夏休みにはほとんど毎日、全部員が集まった。阿部先生、萩原先生の指導を受けながら皆ありありと闘志の色を見せた。この時の皆の気持ちは「やってやれない事はない」この一言に尽きた。練習はつらい、皆めいめいでタオルを持ってきている。暑い、水が飲みたい。しかし誰一人水飲場へ行くものはない。



た。

だが中体連での結果は第三位であった。皆全力を尽くして戦ったのだ。これだけは認めしてほしい。先生方は「よくやった。」と言ってくれる。でも我々の心の中くやしきはまぎれない。先輩達も応援に来てくれたのに、「先輩、申し訳けない。」又いつの日にか、いや、来年度にでも優勝旗を持って帰ってくれ

るのである。我々体操部員は約三十名程であるが、有力な一年生が多いので、この実現もそう遠くはないだろう。

我々はもうこの学校を去るが、きつと在校生の諸君が果たしてくれるだろう二回目の優勝をかたく信じている。(田野井みどり)

テニススクラブ

僕がテニスにはれこんだ動機は、一本のラケットで老いも若きも、男も女も共に一つの喜びを味わう事が出来、スポーツの神髄であるスポーツマンシップを非常に重んずる所にあります。

日本では、まだあまり普及していませんが、世界に目を打つてみるならば、「テニス」の一語は、あらゆる国のスポーツへのパスポートと言えるでしょう。今のクラブの悩みは、第一に正式なコートがないことです。四月・五月と土を選び、ローラーをかけ、「ようやくコートらしくなったなあ。」と、喜ぶのもつかの間。雨が降ったあとに、心なき者が侵入してグチャグチャ。

夏になれば、ここで昼休みにバレーボールをやられる始末。このため、石拾いや、平ら

にする作業で練習を終わる事もあります。

そこで皆さんに出来るだけコート内に入らぬようお願いいたします。第二は、部員の少ない事です。男子三年六名、二年三名、女子二名という少人数。秋の大会には、団体戦へ出場出来ると思っていいたら、大会の一カ月前に一部員が盲腸で入院となり、残念ながら棄権。そこで個人戦だけに出場し、四十三組中ベスト八と、悪い成績でもありませんでしたが、やはり選手層のうすさをまざまざと見せつけられました。

自分の体を鍛え、レクレーションとして楽しむにはちょうどよいスポーツだと思いません。青空の下で一個の白球を追って一心に打つ時こそすべての事を忘れ、実に愉快になります。

後はいの諸君よ、まだ小さな五稜のテニスクラブを、大きな、みんなが楽しめるクラブに育てあげていってください。(高光佳幸)

陸上競技部

六月二十七日、あの熱狂的な応援のもとにくり広げられた中体連陸上競技大会、五稜中学校チームは全力をつくしてたたかいました。

た。その結果、男子優勝、女子第三位、総合第二位でした。昨年に続き、すばらしい成績を収めました。しかし、我々部員は「来年こそは男女共優勝旗を夕」この目標めざして、基礎的トレーニングに余念がありません。一口に練習と言っても、楽なものではありません。自分の体力の限界を高めなければならぬいからです。でも部員はくじけず、限らない前進をめざして、協力しております。

我々陸上競技部員には、夢があります。全国第一位になること、オリンピックで日章旗を掲げる選手を送り出すことです。練習に疲れ、心よりどころがない時でも、夢を考えると新たなファイトがわいてきます。

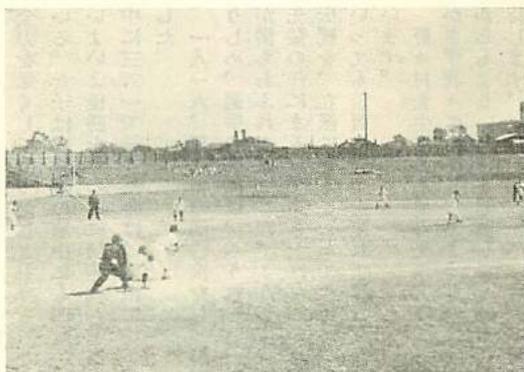
今年は一歩近づきました。オリンピック選手に一つ近づきました。オリンピック選手については、また歴史が浅いので、メキシコ大会にはちょっと無理なようですが、第十九回大会、第二十回大会めざして努力するつもりです。

東京オリンピックで完敗した日本陸上競技界のためにも、私達は、頑張らなければなりません。陸上競技部のモットー「雨にも負け

ず、風にも負けず、雪にも負けず、ただひたすらに目標に向かって、常に心がける態度で前進する」、この言葉を心の支えとして、一丸となって精進したいと思えます。

(山村修)

野 球 部



「野球はチームプレーであり、チームワー

クががっしりと一つになって初めて勝てる。」これは野球をするうえに最も重要なことだ。「チームワークの重要さ」、この点が我々には欠けていた。苦しい練習にたち向かう不屈の闘志、最後まで勝負を捨てない頑張りを、これらはみな固く団結したチームワークから生まれてくると思う。

我々大会前には照りつける太陽の日も、雨の日も文字通りどろまみれになって練習した。トレパンは破れ、真黒になったユニフォームを着て練習に励んだ。

しかし、これだけではだめだったのだ。この結果として、春の少年野球大会では、旭中に一勝したものの、二回戦で的中に敗れた。夏の大会でも、潮見中に惨敗。チームワークを土台にしての努力、これさえがっしりしておればどんな相手でもおそれることはなかったらう。

しかし、野球は楽しいスポーツだ。夏の日など灼熱の太陽に照らされながら真黒になり汗をかきながらの練習のあい間に、土に腰をおろして飲んだ水のうまさは忘れられない。

我々は野球を通して学んだ事を生かして

っぱな社会人にならなければならない。一・二年の部員も、一・二年のうちには練習がつらくて途中でやめる者が大部であるが、それに負けずに五稜中野球部を他のクラブに負けぬように大きく築きあげてほしい。

(渡辺敏明)

卓球クラブ

我々卓球部員一同は、中体連の上位入賞を夢見ながら、一年間、先生方の御指導のもとに、ただひたすらに卓球に励んだ。みんなが楽しく、海に山にと、遊んでいる夏休み中も、選手達は「入賞」この二字をめざして、毎日のように学校へ通った。どんなに苦しい練習にも、それを思うとフアイトがわいてきた。あのす速い、真白な小さいボールとバットに、全身の闘志をこめて対戦するさまは、スポーツマンとして何一つ不足のない人物を作り上げていった。そして、いよいよ、九月六日、待望の中体連卓球会の幕は切つておとされた。

男子は、一日目は無事終了、二日目は湯川中と対戦、この試合に勝てば、目標の三位入賞が達成されるとあつて、全員少し上がりぎ

みだった。そして、大接戦のすえ、三対二でゲームセット、三位入賞こそ失いはしたが、全力を尽くして戦ったことを今も誇りにしている。女子は、強敵の旭中にも四対一で勝ち、いよいよ優勝を目の前に決勝戦へ進出、光成中に三対一で勝つた時は、感激でいっぱいでした。

一人一人、初めての優勝旗をしっかりとにぎりしめ、選手の胸には、「うれしい」の一言が満ちあふれていました。こうして我々は、先輩の汗にまみれて築き上げたこの卓球部の伝統を、立派に守ることができたが、なんといつても監督の先生を忘れてはならないと思ひます。

野々村先生はじめ他の先生方は、一日も欠かさず我々に指導して下さいました。これからもよりいっそう健闘してくれることを期待します。

(木村祐基)

文化クラブ

社会クラブ

社会クラブでは、一学期の始め、西谷・武石阿先生のもとに集まり、各所見学やその他

の研究を決めたのだが、大部分がつこうにより行なえず、一年生が主体となつて、クラブを押し進めていったわけであるが、文化祭が近づいた頃、クラブ員全員が集まり、その日までには、なんとかりっぱな仕事をしようと思ひし、誓ひあつた。クラブらしい活動を始めることは始めたがなにもぶんど員も少なく、日にも真近かつたので、気ばかりあせつて思うようにはかどらなかつた。

しかし何日も活動をづつづつていくうちに、臨時の部員もはいたり、団結も強まり、他の部にもおとらない程になつて、文化祭の前日ぎりぎりまでかかつて製作を仕上げた。そのかいあつてか、当日、会場にはたくさんのお客がはいたり、うれしい程の質問や批評をうけた。とかく、社会クラブなどの文化系のクラブでは、運動クラブにくらべてめだたない存在であります。この一年をとおして、特に文化祭の時に痛烈に感じたことは、何ごともこつこつと根気よくやつてこそいい成果があらわれるということです。

来年度はこのクラブを、後輩のみなさんが、いままでもっとよい、又、内容の充実した計画的なクラブに向上させてくれることを期待します。

(茶野佳博)

書道クラブ

今年はず年に比べて人数は少なくなっているが、活動はさかんにやっているように思います。部員は一・二・三年合わせて七名程、指導の先生は門脇先生です。クラブの練習日は毎週木曜日の放課後です。終了するのはだいたい四時三十分ころです。

私はあまり習字は上手な方ではありませんが好きなので書道クラブに入ったのです。が、三年は勉強やその他テストなどで思うように練習ができなくて、みんなに悪かったと思っています。これからはなるべく参加しようと思っています。その点一・二年はまじめに練習していました、夏休みには思うように練習ができなかつたので、冬休みにはなるべく多くの練習をとって、書きぞめ、その他いろいろと先生に指導していただきたいと思っています。私は卒業も近いのでできるだけ時間をみて、学校でやりたいと思います。又、クラブ以外の人で練習したい人もおおいに参加してほしいと思います、書道を通して多くの友達を作りたいと思います。

書道の本来の目的は精神統一だそうです。前の三年生達にまけないようにがんばりたいと思います。そして書道の目的をもっともっとと深めて行きたいと思います、今の一・二

年生のみなさん、来年はもっと活躍して下さい。
(中者榮子)



化学クラブ

わが化学クラブでは一年生は水曜、二年生は木曜、三年生は金曜日に集まることにし、部長を中心にクラブをおこなってきました。

しかし、中心人物の部長は他の学校に転校し、今では副部長しかいません。しかし、部長がいなくてもみんな協力し立派にクラブをもつていきました。わからない事、むずかしい事など初めは失敗しましたが、石塚先生が手を取って教えて下さいましたので二度と失敗する事がなくなりました。ですから文化祭の時は一年生の男子はインク、女子は石ケン、二年生は電子計算機と団体アルコール、三年生は塩化水素での噴水をし、どれもみんなが一生懸命におこなったおかげで失敗もせず、全部が成功しました。これもみんなが協力し一生懸命におこなったからだと思えます。これからも化学クラブを立派にするためにみんなで協力しよりいっそうよいクラブにしてみたいと思います。

(磯田吉章)

生物クラブ

私達生物クラブにとっては、今年はずともいそがしい年でした。まず三月の末に千葉先生が転任されたので、生物クラブは、一時つぶれるかと思つたが、桑川先生が来られたので続けることができた。前の先生とやり方がちがうので、初めはまごついたがすぐになれた。

新しく来られた桑川先生と二・三年生にわけて、一年は自由研究で、個人またはグループで日曜や夏休みなどを利用して実験したり、観察や採集に出かけた。僕などは、竹やぶの中に入っていくとへびなどが出てくることなどがたびたびあった。ここでクラブで一番こまった時と、うれしかったことを書いておきます。みなさんも知っていると、思います。が、夏休みの展示会で五稜の作品は、昨年より出品点数が多く、また入賞した数も多くなりました。これは、クラブ活動並びに理科に興味をもつ生徒が多くなったことです。つぎにこまったのは、文化祭の時に使う教室が、去年とちがいで、一教室を生物クラブだけで使うことになったのに、さっぱり研究がまとまらず、みんなでおそくまで残ってやっと出き上げられたことです。それだけに文化祭が終わったときは、みんなはっとしました。しかし、それも思い出となった今は、僕たち三年生は、今後の生物クラブの発展を心から祈ってペンをおきたいと思う。

(伊藤 茂)

音楽クラブ

今年の音楽クラブの人数は約四十名、去年

に比べて、めざましい活躍とはいえませんでした。第一の理由は、男生徒がいなかったというところ。私たちが消極的だったというところで、それに試験や行事のために練習ができずコンクールにまにあわなかったことです。でも、昼休みにみんなで集まって、なるべく声を出すために、やさしい歌も歌いました。

よく放課後あることですが、私たちが練習している、窓から顔を出して見にくる人がいます。私はこのことを、とても喜んでいますが、歌っている歌が、とても良い声で、人の心を動かせたのですから。実際、音楽室に入ってきて来てもわかります。教室で歌う声とは全然ちがいます。みんながまじめに歌って、ざわざわしたところは全くありません。でも、女子なので、先生が来る前などとてもにぎやかです。

来年度はぜひ北海道代表になりたいと思います。私たちのクラブに入って、五稜中学校のためにがんばる気持ちはありませんか。

(林 潤子)

美術クラブ

今年の美術クラブでは、一年生・二年生が大半で三年生はごく少数の女子だけでした。

初めてクラブへ入った当時は、デッサン、クロッキー・石膏、遅くまでの文化祭のかざりつけ、何もかも始めてだった。

二年になって新しく安井先生が来られ、又新入生も入り、希望も大きく、クロッキー、石膏、その他いろいろなことをやりました。なんととっても楽しかったことは、石膏だ。どうしてじょうずにやれないのかと、何度もやりなおしてはあったが、あと始末が大へんだった。

床は真白、服も真白、用器は石膏でガチガチ、みんなでタワシをかけて洗ったり、あわてて雑巾で床をふいたこともあった。又夏になると、キャンプや登山写生に行ったり、何もかも楽しい思い出となった。

三年になって、教室も下になり、上に行くのがおっくうになり、又勉強もしなければならぬのであまり顔を出せなかった。

今になってみると、もっとクラブへ行っていればよかった、と反省している。

三年間なじんだこのクラブとも三月には、お別れしなければならぬ。

一年生や二年生の皆さん、他のクラブにおとらないように、スポーツもやり、ファイトを燃やして、今より一層よいクラブにして下さい。

(近江谷末子)

専門部だより

五稜中学校文化部

「五稜中学校文化部」、各クラスから一名ずつ文化委員と称して、知識と教養の持ちぬしが集まって来たかどうかはわからないが、石塚先生を中心に十九名の集まりである。

十九名の仕事といえは、放送・新聞発行・その他文化祭・運動会の会場整備など各方面におおいにハッスル、大活躍。我々の先輩がマイク一つと本数冊で始めた文化部であった。それが図書部と別れ、五稜中の口となつて昼食時の放送を中心に活動している。放送室もりっぱに出来、機械類も着々整備されつつあります。それに比べて我々十九名は機械でもあそばれる状態で舞台裏まではいる始末。「お昼の放送の時間です。」と月曜から金曜まで、おいしい弁当をよりおいしくするように放送する。

ちよつとでも失敗すると、「なんだ、あれ」「もつといいのやれ」と、文句、つまり苦情が来る。「自分でやってみろ」と言いたくなるが、これもみんな、晴の黄色いアナウサー、プロデューサーのことを思うとありがたい気もする。

この一年ももうすぐ終わり、学校長との対談、元のPTA会長の対談、又運動会準備のため遅くまで残ったことなどいろいろなことがあったが、もう卒業のバトンゾーンにさしかかっている。

これからも二年生・一年生がこの文化部をより充実したりっぱなものにしてくれることを信じバトンを渡します。

(林 秀美)

整美部の報告

第一に構成員を紹介します。まず、指導の先生は、阿部先生・坂牧先生・松井先生・小川先生の四人です。次に整美部の委員は各クラス男女各々一名ずつの三十八名によって構成されています。

第二に仕事について述べます。〔一〕阿部先生・小川先生を中心に校舎内の清掃を整美部の第一の仕事としています。毎日の掃除、毎月一回の中掃除、学期末の大掃除となっていますが、なかなか実行できませんでした。〔二〕松井先生を中心に校具の管理的なことをやってきました。〔三〕坂牧先生を中心に校舎前庭の美化をしてきました。

特に今年の前庭をプロックで区画して、ロータリーなども作られ、その右側には学級園を作りました。しかし、でき上がったのが季節的に少しおそかったためあまり上手に管理することもできませんでした。また、左側は二学期に芝生が植えられました。後輩のみなさん、どうぞだいにあつかって下さい。四毎日掃除の結果を表にまとめることを十二月の初めからやることになりましたが、各委員の話し合いが不十分なこととクラス用の表が出来ていないために不便でした。三月期からはきちんと行なう予定でいます。

第三に一・二年生への希望を書いて結びとします。後輩のみなさん、整美部の仕事としてほくたちのできなかったことも多くあると思います。そういう事ができるだけ多く完成してほしいと思います。

この五稜中学校がいつもきれいであるように努力してほしいと思います。

(寺田 誠)

活動した生活部

現在生活部は各クラス四名ずつの七十六名からなっており、専門部で最高の人員で、一番活発に働いています。その中に看護という大事な仕事があります。看護ははたで見るよりつらく、やりがいのある仕事だと思っています。看護は各クラスを四班にわけて一週間交代の当番制になっています。この当番にあたった人は、毎朝八時十五分までに登校し、日直の先生から腕章を受けとります。

それから遅刻を調べ、ときによっては服装検査を行ない、週の日標を中心に一日中皆さんに、注意の目を向けます。このようなことを毎日くりかえすわけです。そして土曜日にはその週と次の週の看護が集まって、引き継ぎを行ないます。ここでその週の反省を提出し、それを中心にして次の週の日標、注意事項を決めます。僕達はこのようにして皆さんに守ってもらう日標や注意事項を決め、それに基づいて皆さんが落ちついて勉強でき、規律ある楽しい学校生活をおくれるように仕事をこなしています。

しかし、まだそのような学校生活を送れるような状態にはなっていません。これは、まだ日標や注意事項、看護の注意を守らない人が存在するからです。我々は人間ですからだれしも失敗やまちがいはあります。まして若さあふれる我々ならなおのこと、廊下を走ったり、教室で騒ぐようなまちがった行動は多くあります。

しかしそれを少なくしていかなければなりません。まちがった行動に気がついたならば反省し、以後気をつけ規則をやぶるような者があつたなら、生活委員に関係なくとも進んで注意するように心がけるならば、まちがった行動をとる者が少なくなると思います。

生活部の委員にもまちがった行動をとることがないわけでもなく、

そのほか改めるべき点もあります。それらを改め、生活委員は看護という仕事に誇りと誠意をもって責任ある行動を取るように心がけ、皆さんが看護の仕事に関心をもち協力しあうならば、みんなが落ちついて勉強でき、規律ある楽しい学校生活を送れるようになることと思います。

僕達生活部は、これからも全員協力しあつて今まで以上によい生活部、よい五稜中学校に前進させていきたいと思っています。

(茶野佳博)

保体部の歩み

校内にある専門部を自動車に例えた時、他の専門部を普通の乗用車としたら、ジャジャ馬と野獣という言葉がびつたりするほくら保体部はスポーツカーというところだろう。そのわけはスタイルがいいのではなく、一部の事しか出来ないという事です。

スポーツカーはレースには良いけれども、一番重要な乗り心地や容易に乗れるというところがないのです。つまりスポーツは万能でも他の事はさっぱりというのがほくらの現状です。

しかし、スポーツカーがレースに出た時はほかの乗用車ではかないように、運動会や球技大会ではほくらがリーダーとなるのは当然の事と思えますが、リレーのメンバーを作ったり、ソフトボール、バレーボール等の選手を決めたりするのは大変な事です。

特に同じような実力を持った人の中から選ぶ場合などはどうしたらみんなが同意するか、どうしたら人ががっかりさせないかで迷ってしまいます。また、遠足等の時もほくらは遊ぶひまもなく駆け回っていかなければなりません。

いろいろある専門部の中でも責任の重い方に属する保健体育部を運転なさる先生方にはたくさんの迷惑をおかけしている事と思いが、ぼくらのスポーツカーを遠慮なくゲタのように使ってほしいと思えます。

最後に、これから保健体育委員後輩の方々は高級乗用車として使う事が出来、スポーツカーとしてレースにも出れるような車を作ってほしいと思えます。

(花村宣幸)

厚生部の活動状況

ぼくが厚生委員になったのは二年の後期からですが、大変むずかしい仕事だと思いました。

でも出来ないながらも今までどうか皆さんの協力でやってきました。まだまだ気をつけなければならぬことはたくさんありますが、気のついたことを一言申します。現在、昼食時、パン、牛乳の注文の配給の時に、集団的にわれ先にと各自が籠に手を入れて取っていますが、大変な混雑でだれが取ったかわからなくなり、そうぞうしくて周囲から見てもだらしなく見えます。注文した人が一列に並ぶとか、名前を呼んで一人一人に渡すとかしたほうがよいと思えます。それから食事後、牛乳の空びんが乱雑に置かれて横になりました。さかさになったりして外から見るとみっともないから、これもおたがいに気をつけて納めてもらいたいと思えます。

まだまだ気をつけることがあると思えます。悪い点ばかり書きませんが、一・二年の諸君ノ自分たちの毎日の生活にもっとも密接な関係をもつ厚生部にもっとも協力して下さい。

(掛端秀男)

図書部 だより

図書部の仕事はなんといっても、生徒の皆さんに本を借し出し、読んでもらうということです。しかし、その借し出しも、今までは相談室という小さな部屋に、図書館が間借りの状態にあったため、今週は「一・二年」、来週は、「三年」と分けて行なうてきました。

又、私達のみたところでは、一・二年は、やはり冒険物・伝記物・空想科学小説といった簡単な文章のもの。又、三年生は「ロマン『ローラン全集』」「トルストイ全集」とかいった、少しむずかしいと思われる文学物・参考書などが、多く借りられたようです。

やはり、このようなところから見ても、一・二年生と三年生とは考え方も違うのだなあと、感じました。又、他の学校では、生徒に対して放課後などを解放して疑問な点を、本を利用して、個人個人で調べさせているようですが、なにしろ、今の状態では実行しかねるところがあります。

新年度になると、図書館も独立してできるようですし、一・二年同時に出し出しをする。又、放課後生徒に解放するという事も可能になるのではないかと思っています。

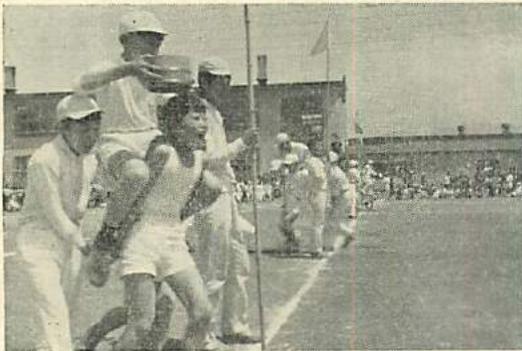
(菊地修一)



餞別

なにくそ魂！！

小川 智博



こと、苦しかったこと、それらが歯車のように次から次へと続いて練習したスタンツビルデング、手にされる。全身泥だらけになって練習したスタンツビルデング、手に

もう卒業、諸君と共に五稜につとめ、三年間共に歩んで来た私は、そんな感じがしてならない。かえりみれば、諸君の心理を理解しているつもりで自分の短いモノサシで計り、無理な指導をして、ともすれば諸君との間に距離が生じがちであったのではないかと思うが、しかし、私なりに全力を傾注したつもりである。

想えば、楽しかった

マメし、額に汗して整地したグラウンド、校内競技大会に勝とうと早朝より練習したこと等々……………
やがてうぐいすの鳴き声と共にある者は社会人として、ある者は高校生として巣立って行くであろう。いずれも前途に難関が山積している。その時に初めて中学時代をふり返えるであろう。そこで気づけば、諸君の前途は洋々と広がるであろう。

しかし、えてして、挫折寸前になることも多くあろう。自分の能力の限界を感じる状態におかれればなおのこと、叫びたくもなろう。こういう時に私は次の言葉を口にす。「なにくそ、こんなことで負けてなるものか」ピンチに直面してこそ我々は前進する動物である。能力は、精神力で無限に広がるもの、常に心に「なにくそ魂」を持ち、事ある毎に体当りで解決するよう望むものである。諸君が頭をかかえて涙する姿をみ、「なにくそ」と立ち上がる姿を想い浮かべて、送別のことばとしたい。

思いつくままに

蘇馬辰郎

孔子の言葉に「学びて思わざれば、すなわちくらし。思いて学ばざれば、すなわち、あやうし」というのがあります。

これは「ただがむしゃらに物を覚えても、考えなければ何も身につかず、又考えてばかりで実際に学問しなければ、確実性がない」という意味です。

さて君達は、学校でいろいろ勉強してきましたが、「学びて思わざる」式の人が大多数でないかと思えます。

いっしょうけんめいに知識だけをつめこみながら、ちっとも人間としての巾広さや、深さや、暖かさのない人、そんな人がとても多いような気がするのです。

人間とは何か？社会は？死とは？愛とは？等々深く考えて勉強した人は何人いるでしょうか。

君達の多くは、恰度山の中で濃霧にあつた遭難者のようなものです。ただ目的地が判らず、でたらめに歩き回り、同じところを堂々めぐりして疲れて動けなくなるようなものです。では、どんな心がまえが勉強に必要なんでしょうか。ただ本に書いてあることを覚えるだけではないけません。人のいうこと、先生のいうことをうのみにすることではありません、まして高校入試のための受験勉強ではありません。自分の進むべき道をじっとみつめ、自分の生き方を深く考え、自分達の社会がいかにあるべきかを考えることではないでしょうか。

君達は、高校へ行く者、就職する者と、それぞれの道を進みます。

その就職する者の中に、中学が終わったから、勉強も終了だと考える人がいるとしたら、こんな残念なことはないし、それこそ大まちがいたと思います。卒業したからこそ、むしろわくの中にはまらない自分のすきな勉強、本当の勉強、身についた勉強が出来ると思うのです。

そして、高校進学する人たちは、大学受験が真の学問でないことを銘記してほしいのです。「大学さえ出たら就職条件がよいから」と思う進学と——これが悪いというのではないが——「本当に学問の真理を探究せんとする」進学とを混同してはしくないことです。大

学を出てつとめてから、出世や上役へのゴマすりばかりに身をやつし、マージャンや酒しかない人生を送っている大人を多くみかけます。

そんな大人になってほしくないのです。さて、大分えらそうなことを書きましたが、かくいう私自身の立場からして、点数は何点？順位は？とかずいぶん君達を責め、あたかも点数をたくさんとらせることが、真の教育であるようなとんでもないさつかくの中で君達にもそんなまぢがった勉強のしかたをおしえていたことを申し訳なく思います。そして高校へ進学出来ない人々にも十分面倒をみてあげ得なかつたことを深くおわびして筆をおきます。

何でも若いうちに

竹内 巖太郎

子供の時には早く大きくなりたと思った。しかし、今大きくなってみると※養老の滝の水でも飲みたいと思う。

私には君たちの若さがうらやましい。若さというものは、もうそれだけで立派な一つの特権だと思う。特権は大切にしなければならぬ、しかし濫りに用いれば災いをまねく。

学問にしろ、何かの稽古事にしろ、若い時にやつてこそ身につくもので、四十の手習いということはなかなか大変なことだ。

三十路の坂をこえた年になってから、自分自身の全てにわたつての力の無さを考えると焦燥の念にかられるばかりだが、これも結局若い時に怠けた罰だと思ふ。

君たちの頭や体は海綿みたいなもので、いくらでも水を吸うことができるのだ。今の中に何でも覚えるにいいだけ覚え、鍛えるにいい

だけ鍛えぬいてもらいたい。将来の栄光や成功は何もしないでは得られない。物事は何でもやっただけのものである。卒業後の自重加餐を折るや切である。

※ 養老の滝の水

日本の昔話、この水を飲めばだんだん若くなるということである。

// 歓喜の歌 //

桜井 恭子

晴れる青空 漂う雲よ

小鳥はうたえり 林に森に

心はほがらか 喜び満ちて

みかわす我らの 明るき笑顔

皆さんが三年間よく歌った歌、ベートーベンの第九交響曲「第四章楽章」の「歓喜の歌」の一節です。皆さんの心境はこの歌そのままではないでしょうか。義務教育を終え、今度は自分の才能にあつた道に進める時期です。進学に就職に胸ふくらませ、卒業をまつている事と思います。高校での生活、職場での生活、皆それぞれ生活の場は違つても、皆さんの求めているものには、違いがないと思います。この「歓喜の歌」を作ったベートーベンの生涯を皆さんはご存知でしょう。

三十才の時耳の病気になる、ついに死を決して、ハイリゲンシュ

タットという森で遺書まで書いたベートーベン。その時、彼は自然の美しさに心を打たれ、もう一度立派な音楽を書こうと決心しました。その後ますます作曲に精進し、後世に残るすばらしい音楽を書きつづけました。彼の最後の作品、それは耳が全く聞こえなくなつた中で、苦悩と戦いながら大曲を作曲したこの「歓喜の歌」なのです。

皆さんもこれから苦しい目にあうことも数多くあるでしょう。その時、苦悩と戦つたベートーベンを思い出して下さい。苦しみを征服した時、自然にこの「歓喜の歌」が、口ずさまれる事でしょう。

俳句

一年 河村 真智子

ふるさと

秋の山美声聞こえる草むらに

ふるさとや遠くの山も青々と

青空をまつ白い雲が流れつつ

野や山にゆれるピンクのねじれ草

三十九年度学校日誌から

四月 一日 着任した職員

武石 光正 先生 (柏野小)

桑川 俊郎 先生 (潮見中)

齊藤 正宏 先生 (新卒)

婦山 祥子 先生 (新卒)

四月 六日 始業式・新任式・入学式

四月 七日 退任式

井上 豊 先生 (若松小)

千葉 和衛 先生 (千代ヶ岱小)

笠井 敬一 先生 (新川中)

吉田 ヤエ 先生 (退職)

対面式

四月 九日 修学旅行生内科検診・父兄会

四月 一六日 形態測定

四月 一七日 修学旅行一二時二〇分出发

四月 二一日 修学旅行一六時四五分帰着

一年学級写真撮影

四月 二五日 父母と先生の会総会

四月 二七日 月例テスト

四月 二八日 三年記念植樹

五月 二日 生徒会学級委員・専門委員任命式

五月 四日 遠足

一年飛行場二年トラピスト三年雁皮平

五月 六日 生徒会看護活動開始

五月 七日 母の会総会

五月 八日 校庭地ならし

五月 一一日 砂場工事着手

五月 一八日 内科検診(二三日迄)

母の会幹事会

五月 一九日 中間テスト

五月 二〇日 校庭赤土搬入

前庭植樹開始

五月 三一日 第四回大運動会

六月 一日 菊地聰子教諭送別式

六月 三日 家庭訪問週間(九日迄)

聴力検査・ツ反検査

六月 五日 図書館貸出開始

六月 九日 歯科検診(一二日迄)

六月 一一日 耳鼻科検診(一二日迄)

六月 一二日 航空写真撮影

六月 一五日 環境整備週間(二六日迄)

六月 一六日 眼科検診(一七日迄)

六月 一八日 月例テスト

六月 一九日 母の会工場見学

六月 二三日 学力調査(二四日迄)

砂場・鉄棒工事完成

六月 二七日 中体連陸上競技大会(二八日)

男子 優勝 女子 三位

綜合第二位

七月 一日 港祭巡視(三日迄)

七月 三日 港祭反省

七月 七日 輔導委員會

七月 九日 期末テスト

七月 十一日 B・C・G 接種

七月 十三日 一学期反省

七月 十四日 腸バラ注射(一六日迄)

七月 十六日 学期末大掃除

七月 十七日 前庭砂利入れ
母の会講座

七月 二〇日 前庭整備週間(二六日迄)

七月 二一日 父兄会

七月 二三日 学校通信・校外班地区別集会

七月 二四日 一学期修業式

七月 二六日 全日本放送陸上競技大会参加

八月 五日 召集日

八月 一九日 二学期始業式

八月 二一日 理科室暗幕装置施設

八月 二四日 教生着任式

白淵伸一・小西孝男・石崎保代・九嶋敏雄の

四教生先生 夏休み作品展示会

九月 六日 中体連七種目競技大会

卓球部 女子優勝

体操部 綜合第三位

九月 八日 理科作品・発明工夫作品受賞伝達式

九月 一〇日 道南三地区英語教育研究大会

九月 一二日 遠足

一年仁山・二年駒ヶ岳登山・三年仁山・大沼

九月 一五日 聖火リレー出迎

本校の随走者宮下隆・寺山榮子

夏休み作品授賞

前庭黒土搬入

校内球技大会(一九日迄)

九月 一六日 母の会赤川炊事遠足

職員内科検診

九月 二八日 生徒会後期役員任命式

九月 二九日 写生遠足 一年税関前

二年汐見ヶ丘神社・函館公園
三年湯倉神社・香雪園

一〇月 一日 一六ミリ映写機検定

一〇月 二日 北側コート開き

一〇月 三日 母を讀える作文入賞伝達式

教生着任式

一〇月 六日 前庭地ならし

一〇月 九日 第四期工事土台杭打終

一〇月 一〇日 開校記念日

一〇月 一四日 母の会料理講習会

一〇月 一七日 文化祭 弁論大会・展示会

- 一〇月一八日 文化祭 音楽会・展示会
- 一〇月二一日 オリンピックTV視聴
- 一〇月二二日 学校参観日(第一回)
- 三年父兄会
- 一〇月二六日 地区懇談会(二七日迄)
- 一〇月二七日 中間テスト(二八日迄)
- 一〇月三〇日 前庭の芝植込
- 一〇月三十一日 読書会・英語祭参加
- 十一月一日 指導主事学校訪問職員研修の日
- 十一月二日 インフルエンザ予防接種(一三日)
- 煙筒取付検査
- 十一月四日 母の会座談会
- 十一月六日 月例テスト
- 十一月二四日 三年就職生徒に関する父兄会
- 十一月二六日 市内生活指導協議会
- 十二月一日 生徒会誌原稿募集
- 十二月七日 冬の健康管理
- 十二月一〇日 消火器取扱講習会
- 十二月二日 母の会料理講習会
- 十二月二一日 補導委員会
- 十二月二二日 父兄会(三年二八日迄)
- 十二月二三日 生徒会地区別集會
- 十二月二四日 二学期終業式

俳
句

三年 高橋悦郎



夏

水をあび 黒くひかれる 弟の背
 ちようを追う 弟の影 長くなる
 夏の陽に 羽根を光らせ かもめとぶ
 白い帆の 鮮かに見ゆ 夏の海
 部屋のすみにかとり線香 ともす宵
 家中で 冷えし西瓜を 分けて食べ
 夏の陽に バラの一輪 輝きて咲く
 ふろをたく 流れる汗を ぬぐいつつ

三十九年度受賞者一覽

全国学生書道展 (特選) 福沢 公子

安全に関する作文 (入選) 畑 久夫、花村 宣幸、松井 葉子

高光 佳幸、前川 成子

(佳作) 山道 美幸、若杉 継道

北海道奎星書道展 (特大賞) 大石 哲夫

私のおかあさん 図画の部

(入選) 平川 真美

母に感謝する作文 (入選) 塩田 敬子

春の子供書道展 (金賞) 大石 哲夫

(銀賞) 城地 隆司、後藤 睦子、福原 葉子

葛城とも子、高江加寿子

(銅賞) 福沢 公子

HBC学校放送詩 (入選) 白沢 真澄

理科作品展

(理科研究会会長賞) 高江加寿子、遠藤いく子、庄司 幸代

渡辺真理子、鈴木まき子

(博物館長賞) 桜庭 和子

(商工会議所会頭賞) 大村 賢二

(北斗ライオンズクラブ賞) 菅野 一男、広川 豊、山崎 博隆

(読売新聞社賞) 今井 正人、上沢 雄幸、笹島 文平

(銅賞) 吉川 和幸、古屋敷 透、小川 久明

南 隆雄、中村 秀光、宮原 正剛

白木 貴子、桜井 聡、岩間日出夫

竹が原晴司、高光 佳幸、津田 博昭

北見 康二、小倉 延介、大沼八寿雄

高田真理子、佐々木恭子、神門由紀子

有本恵美子、伊丸岡愛子、田巻 恵子

園分 和子、金曾 淳子、矢田 啓子

会田 典子、菅野ふみよ、五十嵐秀隆

中村 柳二、島村恵美子、小松千恵子

桃木 義樹、瀬戸 滝枝、及川 洋子

発明工夫展

(市長賞) 寺山 栄子

(グリーンクロス賞) 高橋 悦郎

国土建設に関する作文 (土木部長賞) 日下部早苗

(入選) 沢口 良介

全道中学生電気スタンド工作コンクール

(佳作) 中島 洋見、木谷 薫

交通事故を考える作文

(NHK放送) 花村 宣幸

北海道学生書道展 (特選) 金谷 芳江

冬休み暇習字の部 (入選) 寺山 栄子

卒業生特集 ⑤

卒業生住所録

三年A組 担任 蘇馬辰郎

伊藤 貫	大沼 八寿雄	小倉 延介	金沢 明人	鍵主 和樹	掛端 秀男	北島 康二	北見 誠	工藤 武久	島田 一己	鈴木 修一	高桑 与四郎	高光 美幸	月館 英行	徳田 誠	戸島 謙一	仲矢 英雄	幡豆 哲治
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
函館市五稜郭町	五稜郭町	田家町	八幡町	五稜郭町	宮前町	白鳥町	田家町	五稜郭町	五稜郭町	柳町	五稜郭町	田家町	白鳥町	亀田郡亀田町字	函館市田家町	五稜郭町	宮前町

藤沢 満	古村 俊夫	細田 雄治	丸山 幸秀	向井 重光	山崎 正吉	山村 功	米谷 正次	高橋 雅樹	柏木 裕子	北川 洋子	工藤 了子	小池 泰枝	小林 陽子	佐門 敏子	菅谷 利子	田中 博子	田野井 みどり	寺山 榮子	中村 真理子	永井 美和子	能登 嘸子	平川 真美	藤田 眞子	南川 眞子	山崎 貴美子	野呂 彰子	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
函館市旭町	白鳥町	五稜郭町	湯川町	五稜郭町	田家町	宮前町	白鳥町	田家町	白鳥町	宮前町	白鳥町	五稜郭町	田家町	田家町	五稜郭町	田家町	五稜郭町	田家町	田家町	田家町	柳町	田家町	宮前町	五稜郭町	五稜郭町	亀田郡亀田町字赤川通り	亀田郡亀田町字赤川通り

三年B組 担任 竹内巖太郎

五十嵐恒夫	函館市白鳥町
伊藤茂	五稜郭町
梅田憲夫	田家町
大石哲夫	亀田郡亀田町字
小山田幸夫	函館市田家町
兼子保男	〃
木村良春	〃
小岩春美	〃
今秀雄	港町鉄道敷地
佐藤忠夫	五稜郭町
佐藤洋	田家町
清水隆	白鳥町
東海林正平	田家町
千葉隆	五稜郭町
中村輝夫	〃
浜田美博	田家町
平田憲次	〃
平田隆	〃
見尾博樹	五稜郭町
石畑篤子	〃
及川洋子	宮前町
近江谷末子	白鳥町
加藤千代子	〃

木村陽子	函館市田家町
齊藤すみえ	〃
桜庭和子	五稜郭町
沢田富子	田家町
崎野照代	〃
設楽美枝子	〃
菅野雪代	五稜郭町
田中啓子	〃
津田繪里子	八幡町
中里喜美江	田家町
年代真理子	〃
前川成子	大黒町
村井利津子	八幡町
八島真紀子	田家町
山崎秀子	白鳥町
山崎道子	〃
三島裕一	〃
水間秀夫	田家町
森山勇意知	宮前町
八木橋勝夫	白鳥町
矢口敏文	〃
山崎光章	〃
山本耕一郎	亀田郡亀田町字中道
山本透	函館市田家町
星川基	〃
	柳町

三年C組 担任 松井喜一

山田鉄夫	村山博	村田通	松野茂見	古藤晴起	筆村雅明	樋本正史	林秀美	西川次郎	富田正勝	高橋雅明	仙代春義	鈴木福司	神健治	沢井敬宜	小柳善昭	小林裕一	岡本竹俊	川浪幸一	小田章	今井則夫	池田常男	池田三吉
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
			函館市五稜郭町	函館市五稜郭町	田家町	白鳥町			五稜郭町	八幡町	白鳥町	八幡町	五稜郭町	函館市白鳥町	函館市白鳥町	函館市田家町						

鈴木繪久子	百沢悦子	邇百合	細野京子	藤島律子	福井ゆみ子	平田久美子	能登敏子	千鳥操	榑広子	西家みや子	駒野留美子	幸崎純子	工藤峯子	城井田宜子	金丸紀子	大岩美恵	伊与部充子	井上敏子	石川藤美	青山律子	岸本正明	高橋憲夫	若月陽一	吉田修一	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
亀田郡亀田町字木通り	白鳥町	柳町		函館市五稜郭町	亀田郡尻岸内町字日浦	田家町		白鳥町	五稜郭町	田家町	函館市白鳥町	亀田郡亀田町字中道	亀田郡亀田町字中道	八幡町			田家町				白鳥町	八幡町	田家町	五稜郭町	函館市田家町

三年D組 担任 藤原孝一

細川三郎	東山崎正一	平山正隆	林山正成	飛内史隆	十島貞信	須藤政人	鈴木正吾	菅原広行	齊藤雄二	齊藤雅樹	木村光洋	木村政俊	川村順一	鎌塚敏夫	柏山雅元	柏西隆夫	小川博司	岡本俊一	大坂哲治	越後谷潮	荒生憲明		
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
				五稜郭町	宮前町	〃	五稜郭町	田家町	五稜郭町	宮前町	五稜郭町	白鳥町	田家町	五稜郭町	田家町	宮前町	五稜郭町	〃	〃	田家町	八幡町	田家町	函館市宮前町

松岡百合子	吉田育子	吉川たかよ	水木れい子	逸見あや子	福島典子	沼田良子	西沢みや子	奈良香代子	長尾京子	坪谷さち子	神紀子	白木貴子	齊藤妙子	小林真理子	小寺真知子	菊谷ミチ子	加茂良子	赤石陽子	赤石優子	小沢松泰	師岡明	松葉博州	増田順司		
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
田家町	〃	〃	〃	五稜郭町	八幡町	田家町	〃	五稜郭町	八幡町	〃	〃	〃	田家町	五稜郭町	〃	田家町	梁川町	白鳥町	〃	〃	〃	五稜郭町	田家町	宮前町	函館市田家町

三年E組 担任 坂牧達夫

馬場誠吾	花村宜幸	中村柳二	出町泰男	月永長次	高橋光一	高橋悦一郎	高田保	菅原憲康	城地孝雄	下谷秀雄	塩谷光雄	佐々木信綱	五味沢重敏	小西憲男	工藤修二	桃木義樹	上村次夫	岩崎進	井上好春	伊藤博	磯田吉彰	浅倉博	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
八幡町	田家町	〃	五稜郭町	田家町	〃	〃	五稜郭町	白鳥町	八幡町	〃	白鳥町	〃	〃	〃	五稜郭町	柳町	〃	五稜郭町	宮前町	田家町	五稜郭町	函館市八幡町	

(道管アバート)

和山好子	渡辺麗子	山村美恵子	柳谷さい子	榎方洋子	端川元子	西谷よし子	中島和子	曾根泰子	仙海代志枝	鈴木世津子	坂井路子	小林優子	木村信子	川浪多万恵	川上美樹子	小田野末子	上田知子	大隅久子	和田勝義	柳沢孝二	丸山正雄	堀内良一	藤島郭雄	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	五稜郭町	宮前町	〃	五稜郭町	八幡町	五稜郭町	日吉町	宮前町	五稜郭町	田家町	五稜郭町	田家町	五稜郭町	若松町	五稜郭町	田家町	宮前町	〃	〃	五稜郭町	白鳥町	函館市五稜郭町	

三年 F 組 担任 野々村 正晴

古屋敷	平野	林博	中村正光	中田紀男	茶野佳博	武内保	関博	鈴木正信	佐藤宗英	佐藤勝	佐々木等	齊藤雅博	越田雅樹	川崎淑広	加茂博	門脇治	葛西憲一	奥野裕	上田良親	市丸宗正	石橋悦朗	網野勝康
同	博	久	光	男	博	保	及	信	英	勝	等	博	樹	広	博	治	憲	一	親	正	朗	康
亀田郡亀田町字中通	五稜郭町	函館市柳町	亀田郡亀田町本通り	白鳥町	五稜郭町	田家町	五稜郭町	白鳥町	五稜郭町	松蔭町	白鳥町	五稜郭町	宮前町	白鳥町	田家町	五稜郭町	八幡町	五稜郭町	田家町	〃	〃	函館市五稜郭町

渡辺	山下	服部	中川	園木	七戸	佐竹	笹谷	桜田	栗林	神門	金谷	金村	金丸	小山内	今井	伊藤	磯部	五十嵐	荒木	青木	渡辺	山崎	柳谷	宮下
恵理子	多美子	君子	真樹子	志津	妙子	悦子	悦子	礼子	未雪	静子	芳江	敏子	郷子	百合子	幹子	雅子	真知子	良子	純子	佳子	敏明	義夫	庫司	隆
〃	〃	〃	函館市五稜郭町	亀田郡亀田町字神山	〃	田家町	白鳥町	五稜郭町	田家町	五稜郭町	宮前町	田家町	八幡町	五稜郭町	宮前町	五稜郭町	田家町	白鳥町	〃	〃	五稜郭町	函館市八幡町	亀田郡亀田町東山	函館市五稜郭町

三年 G 組 担任 小川 智博

藤田房雄	藤田秀行	藤田敬志	廣田勉	羽田満美	林田義雄	寺田誠	田原清一	高橋盛俊	清水一司	沢村健一	小島英樹	小泉哲夫	木村祐基	菊地修司	川村康一	加藤要一	加藤幸平	小川繁伸	小山田義春	榎森修一	石橋待郎	安藤誠	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
五稜郭町	白鳥町	天神町	白鳥町	五稜郭町	八幡町	白鳥町	田家町	五稜郭町	柳町	五稜郭町	〃	田家町	宮前町	五稜郭町	田家町	五稜郭町	白鳥町	〃	函館市田家町	亀田郡亀田町本通り	〃	函館市五稜郭町	〃

和田法子	和田潤子	山道美幸	星野純子	筆村恭子	藤田静子	福井美代子	張田芳江	野呂美知子	中者栄子	高橋ミツ子	島崎和子	三麗律	小松美恵子	河合美通子	金沢美穂子	大沢和子	内山晴代	有本寿美子	吉田隆	山村修	山田和雄	山田義幸	保科隆	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
五稜郭町	白鳥町	田家町	宮前町	五稜郭町	追分町	〃	〃	〃	五稜郭町	松蔭町	港町鉄道敷地	田家町	函館市五稜郭町	亀田郡亀田町字中道	田家町	八幡町	白鳥町	田家町	〃	〃	〃	五稜郭町	田家町	函館市白鳥町

職員一覽

氏名	担任	教科	住所
沼山 吉之助	校長	数学	深川町
土門 厚		数学	深堀町
藤馬 辰郎	三A	英語・社会	谷地頭町
竹内 巖太郎	三B	国語・社会	本町
松井 喜一	三C	技術	田家町
藤原 孝一	三D	数学	千代ヶ岱町
坂牧 達夫	三E	理科	谷地頭町豊道營住宅
野々村 正晴	三F	英語	松蔭町
小川 智博	三G	保健	深堀町
武石 光正		社会	杉並町
成田 恭子		家庭・習字	海岸町
桜井 恭子		音楽	千代ヶ岱町
広沢 博正	二A	数学	時任町
石塚 孝成	二B	理科	湯の川町三丁目
菅原 昭一	二C	美術	谷地頭町
門脇 初代	二D	英語	松川町
金田 豊秀	二E	国語	田家町
永井 太郎	二F	音楽	松蔭町

阿部 光房	保体	松川町
三十刈 智一	社会	中島町
西谷 富士雄	社会	深川町
永谷 嘉一	英語	日吉町
安井 孝	美・技・習	田家町
齐藤 正宏	数学	千代ヶ岱町
萩原 ハル	保健	柏木町
平沼 靖雄	国語	五稜郭町
桑川 俊郎	理科	東川町
窪田 暉子	国語	亀田郡亀田町本町
綿山 祥子	養護	人見町
奥寺 明	事務官	蓬萊町
榊田 美代	事務官	田家町
荒谷 ミワ	用務員	亀田郡亀田町富岡
沖野 喜久雄	用務員	港町
日野口 一男	用務員	田家町
藤崎 孝造	用務員	汐見町
藪下 寛	用務員	田家町



なりました。

五稜中学も第二回の卒業生を送り出し、校舎も最後の完成を目指して工事が急ピッチに進められています。

卒業していく皆さんの将来の多幸をお祈り申しあげると共に、時々「五稜」をひらいて母校をしのんでいただくよう、心からお願いいたします。

(竹内)

この間、やっこのことで作品の収集を終え、今編集を終えました。なにしろこの仕事に生徒の手が加わるのは初めてなので、前号より立派に仕上げようといくら緊張しましたが、先生に、仕事の方法や要領をおそわって、夢中になってしている間に、終わってしまいました。

して楽しかったこと、苦しかったこと、短かい間にいろいろありました。今後、この貴重な体験を生かした仕事をしてみたいと思います。

(山崎)

此の度、初めて生徒会の手でつくられた生徒会誌「五稜」は、いわば一年間の過去の苦難・歡喜・悲哀の集計です。過去は現在、そして未来への希望の土台です。ここに過去が単なる過去に終わらぬ意義があると思います。編集の方法など全く知らなかった私達で

生徒会誌「五稜」の四号をお届けいたします。生徒会誌とは言いながら、今までは先生が中心で編集してきましたが、今号からは、生徒会の役員諸君にも編集に参加して頂き、文字通りの生徒会誌に

はありましたが、各学校の校風が違うように本校の会誌にも特有なものを作り出すのに努力してきました。でき上がったものが、どんなにささやかであっても、その中にある若い世代の歩みを感じとって下さい。そして、卒業のみなさんも五稜を開くことよって過去の苦難・歡喜を思い出し、そこに自分の道を自らの手で築いて下さることを期待します。

(寺山)

五 稜 第 四 号

昭和四十年三月九日 印刷
昭和四十年三月十日 発行

編 集	函 館 市 立 五 稜 中 学 校
電 話	③ 三 四 五 八
発 行 生 徒 会	
印 刷	K K 三 塚 印 刷 所
電 話	② 七 三 九 〇